令和３年度

がん教育総合支援事業　事業成果報告書

地方公共団体名	富山県

１．事業の具体的内容について

（１）自治体における取組

①　協議会について

１．構成員

ア　委員：９人

医師２人（小児科、腫瘍内科）

校長３人（小、中、高）

県がん総合相談支援センター１人

県学校保健会１人

県厚生部健康課がん対策推進班長１人

県教育委員会保健体育課長１人

イ　事務局：３人

県教育委員会保健体育課

食育安全班長１人、指導主事２人

富山県がん教育総合支援事業連絡協議会

	所属及び役職
1	富山県医師会副会長
2	富山県医師会理事
3	富山県高等学校長協会代表
4	富山県中学校長会代表
5	富山県小学校長会代表
6	富山県がん総合相談支援センター統括相談員
7	富山県学校保健会事務局長
8	富山県厚生部健康対策室健康課がん対策推進班長
9	富山県教育委員会保健体育課長
	事務局：富山県教育委員会保健体育課

２．開催時期、検討内容

がんの教育に関する第１回連絡協議会（R3.9）

・事業実施計画

・具体的内容について検討

がんの教育に関する第２回連絡協議会（R4.２）

・事業実施報告

・取組及び成果報告、今後の課題について検討

②　教育委員会としての取組

○　県がん教育総合支援事業連絡協議会の開催

○　「外部講師を活用したがん教育」モデル校への事業説明

○　「外部講師を活用したがん教育」モデル校への講師の派遣調整

○　モデル校における「がん教育講演会」の事前研修会（R3.10.27）

○　モデル校における「がん教育講演会」（R3.12.16）

・県立高等学校１校（１学年、３学年）

○　教職員や外部講師を対象とした「がん教育研修会」（R4.1.27）

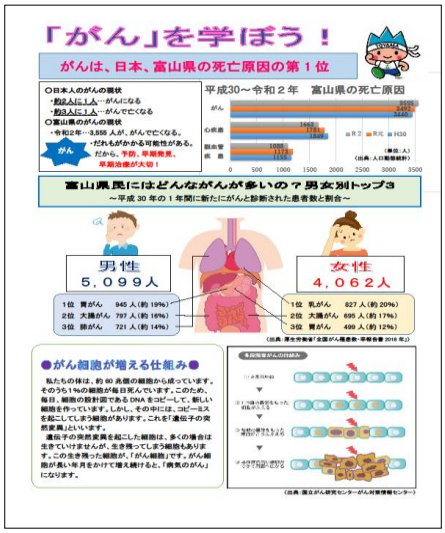
・学校におけるがん教育の考え方や進め方をテーマとした講義

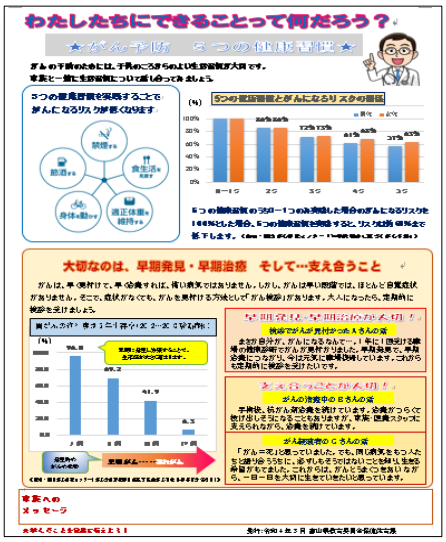
テーマ　「学校におけるがん教育の考え方・進め方」

講　師　新潟医療福祉大学　健康スポーツ学科

教授　杉崎　弘周　氏

○　県内のがんの現状やがん経験者の声を掲載したがん教育啓発リーフレットの作成・配布（全中学２年生配布）





（がん教育啓発リーフレット）

③　保健部局や地域の専門機関等との連携

　県厚生部健康課がん対策推進班を通じて県がん総合相談支援センターに「外部講師を活用したがん教育」モデル校への講師派遣協力依頼をすることにより、講師（がんピアサポーター）派遣の調整がスムーズに行われた。外部講師派遣依頼の窓口を教育委員会とし、県がん総合相談支援センターと連携して、学校のニーズに応じた外部講師の派遣を行うことができた。

（２）モデル校における取組

○　モデル校　　富山県立富山商業高等学校　１学年２４０名、３学年２７５名

○　教育課程上の位置付け　　特別活動

○　実施日　　令和３年１２月１６日（木）

○　講　師　　富山県がん総合相談支援センター　ピアサポーター

○　講演内容　　「忘れない　最後の笑顔」～小児がん・脳腫瘍と闘い続けて～

　がんに対する正しい理解とがん経験者や家族などのがんと向き合う人々に対する共感的な理解を深め、自他の健康と命の大切さについての学びを深める。

○　進め方

・「がん教育講演会」の実施に向け、事前研修会（外部講師、講師コーディネーター、実施校担当者、教育委員会出席）を実施する。

・事前研修会において、生徒の実態や配慮事項等について確認し、講演内容の方向性等を検討する。

・講演会の前に保健体育科の授業において、がんに対する正しい理解について学び、その後、講演会を実施する。

【保健体育科目標】がんについて正しく理解できるようにする。

【講演会目標】　　いのちの大切さについて考える態度を育成する。

（３）教職員や外部講師を対象とした「がん教育研修会」

○　実施方法　　Web 会議サービスを用いたオンライン研修

○　対　象　　市町村教育委員会指導主事、校長、教頭、保健体育科教諭、保健主事、養護教諭、がん教育に関心のある方（外部講師等）

○　実施日　　令和４年１月２７日（木）

○　講　師　　新潟医療福祉大学　健康スポーツ学科　教授

○　研修内容　　「学校におけるがん教育の考え方・進め方」

　学校におけるがん教育の考え方や効果的な進め方等についての講義を通して、教職員等のがん教育に関する理解を深め、学校におけるがん教育の充実を図る。

２．事業の達成度について

（1）児童生徒対象の「がん教育講演会」の実施

・講師コーディネーターが学校の実態、児童生徒の発達段階（小・中・高）、講演内容の希望を考慮して外部講師をコーディネートすることによって、学校の実態やニーズに合った外部講師を派遣することができ、効果的な事業となった。

・本人、または家族や身近にがん患者がいる児童生徒の把握や配慮の工夫について
実施校で担当者、外部講師等が事前打合せを行い、実態把握に努めることで適切な配慮をしながら講演会を実施することができた。講演前、気分が優れないときは、「退席・途中退席ＯＫ」「耳をふさいでもＯＫ」であることを事前に生徒に伝え、学年担当教諭や養護教諭と連携して適切な対応をすることができた。
・１時間の目標を明確にするための講演内容の精選について
１時間に１名の講師を依頼することで、内容の精選を行うことができた。また、講演会前に、保健体育科でがんについて学習することにより、生徒は一定の知識をもって講演内容を理解することができた。

〈検証〉

① 生徒の事前事後アンケート結果より

・多くの調査項目において意識の高まりが見られた。平成 27 年度に同様なアンケート調査を実施したところ、大規模校での調査結果に「無回答」がやや増えることが懸念されていたが（2%程度)、今年度調査によると事前事後のアンケート結果ともに「無回答」は全くない。
・がん教育の重要性、がんについて正しく理解する意識の高まりがみられ、がんやがん患者との共生についての思いも深まった。
・「がんの学習は健康な生活を送るために重要だ」の項目で「そう思う」と回答する割合

	実施前		実施後		
【	83.4%	→	91.3%	】	⇒ 「7.9」ポイント上昇 ↗

・「がんになっても生活の質を高めることができる」の項目で「そう思う」と回答する割合

	実施前		実施後		
【	36.4%	→	56.3%	】	⇒ 「19.9」ポイント上昇 ↗

・「がんと健康について、まず身近な家族から語ろうと思う」の項目で「そう思う」と回答する割合

	実施前		実施後		
【	61.9%	→	72.9%	】	⇒ 「11.0」ポイント上昇 ↗

② 生徒の感想より

・がんという病気はいつ誰が罹ってもおかしくない病気ですが、自分や家族、友達、周囲の人にとって無縁だと思っていました。しかし、実際に闘病生活を送られた方の家族の貴重な話を聴き、「命」について見つめなおすことができました。
・以前、がんは遠い存在であると思っていましたが、祖母ががんで亡くなったり、身近な人ががんに罹ったりしたことから、最近では自分もがんになる確率は高いのではないかと思います。身近な人ががんに罹ったらしっかりとサポートし、自分自身も日頃から健康な生活を意識し予防をしていきたいです。

（2）教職員や外部講師を対象とした「がん教育研修会」の実施

・学校保健、保健科教育が専門分野である大学教授から「学校におけるがん教育の考え方・進め方」をテーマとした内容の講義をしていただき、がん教育の指導の充実について考えることができた。

〈検証〉

① 参加者事後アンケート結果より

・がん研修会の満足度を問う項目で「満足」、「やや満足」と回答する割合が 100%

「満足」と回答	【 66.7% 】
「やや満足」と回答	【 33.3% 】
「やや不満」「不満」と回答	【 0% 】

② 参加者事後アンケートの記述より

・がん教育の実施には配慮が必要であるが、ネガティブな感情ばかりを植え付ける指導になってはいけないことを改めて理解することができた。がんは怖い、死に至るなどマイナスイメージを抱きやすいが、がん

について正しく理解させることが重要である。そのためには指導者自身ががんについての理解を深める必要がある。子供が病気に対して前向きに捉えたり、積極的に予防に取り組んだりするように努めていきたい。

・近親者にがん患者がいるとがんに対するネガティブなイメージをもつかもしれない。しかし、がん教育によってがんに対する理解を得ることができれば、がんが怖いという気持ちだけでなく、予防できるという前向きな気持ちでがんを捉えられるようになってくれると思う。

・がんについての知識や予防法を正しく理解することは、子供たちの生き方に関わってくると思う。養護教諭としてがん教育に関わっていきたいと感じた。

・がん教育によってがん検診の受診率の向上等がん予防への意識向上につながるのではないかと感じ、がん教育の意義を感じることができた。高校でのワークシートを活用した指導は楽しみながら取り組むことができたため、生徒も興味をもち、授業の導入として活用できるのではないかと感じた。

以上のことより、「がん教育研修会」は、教職員等が学校におけるがん教育の考え方や効果的な進め方について理解を深めることができたと考える。

３．今後の課題及びその取組の方向性（今回の事業により新たに見えた課題など）

○　がん教育の充実を図るための効果的な取組

・「がん教育講演会」等の講演内容を「がん教育推進のための教材」としてデータ編集、教材化を計画していたが、個人情報等の内容を含み、詳細な内容の吟味が必要であるため、今年度は研修会の内容や実践事例を周知し、指導の充実を図ることとした。また、前年度に続き、生徒対象用のがん教育に関する指導資料リーフレット（データ化）を作成、配布したが、今後は、講師の許可を得て、映像教材を作成するなど、持続可能な学習となるように工夫を行う必要がある。

○　コロナ禍での外部講師を派遣する出前授業の実施

・コロナ禍のため、令和２年度、３年度はこれまで実施してきた外部講師を派遣する出前授業は実施していない。今後は感染状況を鑑みながら、実施校、実施方法等を検討して出前授業の実施を行っていきたい。その際、外部講師の活用が推進された場合には、謝金等の負担が課題となる。病院やピアサポーターの依頼が集中した場合、本来の業務に支障をきたすことも懸念され、講師の依頼方法についても再考する必要がある。

○　継続的な指導を進めるための家庭への啓発の工夫

・啓発資料を継続的に配布し、指導に役立てることができるように改善していきたい。文部科学省からの教材についても一層の周知を図っていきたい。

・児童生徒が家庭に帰って授業の内容を振り返る手助けとなるリーフレットをデータ化し、各学校の指導時期に応じて活用できるようにしていきたい。

４．モデル校以外での取組について（課題や今後整理すべき事項など）

○　養護教諭をはじめとしてがん教育の必要性についての認識は広まっているが、さらに教職員全体へのがん教育についての理解を広めることが必要である。

○　外部講師を活用する利点は理解されてきており、外部講師の派遣依頼先の紹介等、県として実施すること、各市町村での取組を整理していく必要がある。

令和３年度

がん教育総合支援事業　事業成果報告書

地方公共団体名	石川県

１．事業の具体的内容について

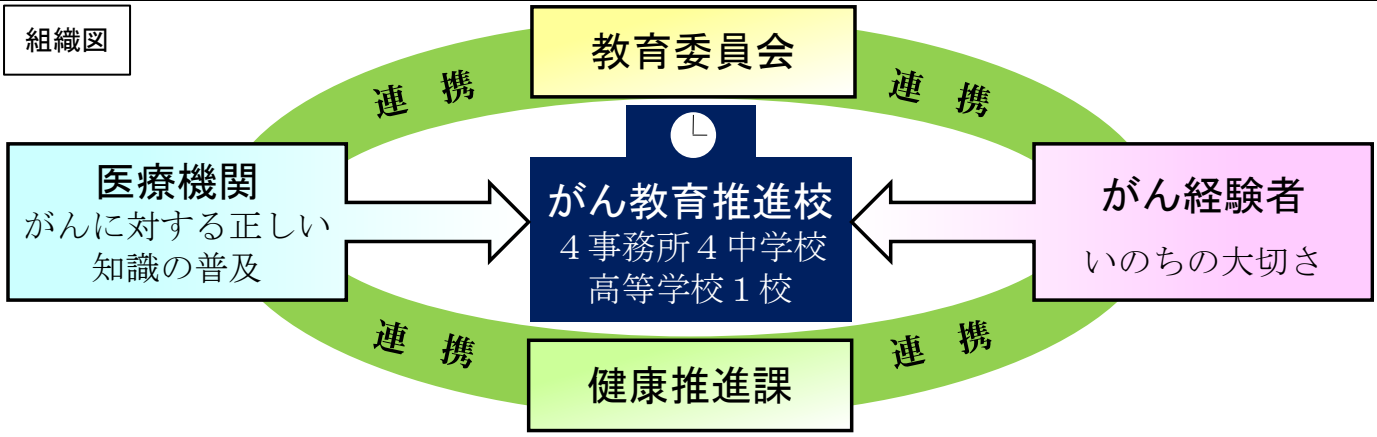
（１）自治体における取組

①　協議会について

（ア）推進委員（計１６名）

所　属	職　名	氏　名
金沢医科大学病院	がん看護専門看護師	我妻　孝則
公立松任石川中央病院	外科部長	石井　　要
はなうめ	ピアサポーター	冨士登寧子
石川県済生会金沢病院	副 院 長	龍澤　泰彦
萌の会	代　　表	和田真由美
石川県立金沢北陵高等学校	教　　諭	薮野秀一郎
川北町立川北中学校	教　　諭	吉田　悦子
内灘町立内灘中学校	教　　諭	菅谷　吉麿
七尾市立七尾東部中学校	教　　諭	水本　智春
能登町立柳田中学校	教　　諭	池田　一博
石川県健康福祉部健康推進課	課　　長	相川　広一
	技　　師	小浦理紗子
石川県教育委員会事務局保健体育課	課　　長	居村　吉記
	課長補佐	奥原　真弥
	主任指導主事	藤本　有香
	指導主事	村本圭志朗

組織図



（イ）開催時期、検討内容

○第１回連絡協議会（紙面開催）８月５日

・事業趣旨の共通理解及びがん教育の推進に向けた計画の確認、日程調整等

○推進協議会（於：各推進校）１０月

・がんの教育に関する保健教育等の指導案作成

・研究授業の日程及び概要について打合せ

※学校の実情や生徒の実態等に合わせ指導案検討の実施

※推進校と講師によるメール・ＷＥＢ会議システム等を活用した打合せ

○「がん教育講習会」（オンデマンド開催及び資料掲載）１月２０日～２月１０日

・がん教育の推進に向けた行政説明・推進校の実践報告

・中央講師によるがん教育についての講演

○第２回連絡協議会（紙面開催）１月２７日

・推進校からの実践報告及び県教委で取りまとめた報告等の実施

・次年度の取組や外部講師リスト、外部講師活用体制等の検討

② 教育委員会としての取組

・第１・２回連絡協議会の設定（事業についての説明・年間計画の確認、成果報告と次年度に向けて）
・推進校の選定・・・・中学校４校、高等学校１校
・外部講師の派遣（専門医等２名、看護師１名、がん経験者２名）
・学習指導案の検討
・「がん教育講習会」の開催（オンデマンド開催及び資料掲載）１月２０日～２月１０日
　解説「学校におけるがん教育の推進について」
　講演「学習指導要領に基づくがん教育の進め方」東海大学体育学部体育学科　教授　森　良一　氏
　各推進校による実践報告書及び学習指導案の掲載

③ 保健部局や地域の専門機関等との連携

関係機関等との連携により、外部講師を招聘し､学校におけるがん教育の推進を図ることができた。健康福祉部健康推進課との連携により、外部講師の活用体制の整備・運用について検討することができた。

（２）モデル校における取組

① 石川県立金沢北陵高等学校の取組

・外部講師（がん専門看護師）を活用した授業実践
・テーマ：がんについて正しく理解し、生涯にわたり主体的に実践できる生徒の育成
・教　科：保健体育 科目保健（授業時数：３時間）
・内　容：「生活習慣病の予防と回復（がんについて）」（２／３時）

がん看護専門看護師をお招きし、生活習慣の改善や早期発見・早期治療の具体および重要性を理解することをねらいとした授業を行った。さらに、その知識を活用して自分ができることや家族をがんから守るためのアプローチの方法について考えた。

② 川北町立川北中学校の取組

・外部講師（がん専門医）を活用した授業実践
・テーマ：がんについて正しい知識を学び、予防策を考え、自己の生活へ生かしていこう
・教　科：保健体育 保健分野（授業時数：４時間）
・内　容：「健康な生活と病気の予防」（３／４時）

事前アンケートの結果を示した後、がん専門医から、がん教育の必要性やがんについての正しい知識（種類、発生メカニズムなど）を話していただき、具体的な予防策をグループごとに考え、まとめた。その後、ワールドカフェ形式で交流し、がん専門医からアドバイス等をいただいた。

③ 内灘町立内灘中学校の取組

・外部講師（がん経験者）を活用した授業実践
・テーマ：がん患者と共に生きることを考える
・教　科：保健体育 保健分野（授業時数：４時間）
・内　容：「生活習慣病の予防～がんについて～」（４／４時）

外部講師としてがん経験者の方をお招きした。外部講師の話を通して、がん患者との適切な共生の在り方やがんに罹患した時の前向きな対処法などをお話していただき、グループワークを通して考えを深めた。また、今回学んだことを家族と話すことで、知識を実生活で活用するきっかけとなった。

④　七尾市立七尾東部中学校の取組

・外部講師（がん専門医）を活用した授業実践

・テーマ：がんの症状や要因を知り、予防するために自分ができることを考える

・教　科：保健体育 保健分野（授業時数：３時間）

・内　容：「生活習慣病などの予防」（３／３時）

外部講師としてがん専門医の方をお招きした。外部講師の話を通して、より深い知識を身に付け、予防策についても考えることで、自己の健康的な生活につなげることができた。また、授業のまとめとして、家族に対するアドバイスを行うことで、がんの予防に対する学びを深められた。

⑤　能登町立柳田中学校の取組

・外部講師（がん経験者）を活用した授業実践

・テーマ：がんを自分ごととして考え、向き合う。
　　そして、自分の健康について考えるきっかけにする。

・教　科：保健体育 保健分野（授業時数:４時間）

・内　容：「がんと向き合い、共に生き、よりよい生活について考える」（４／４時）

外部講師としてがん経験者の方をお招きした。がんを経験した外部講師の話はリアリティがあり、生徒は深く受け止め、聞き入っていた。外部講師の言葉の重みを感じることで、生徒は「自分ごと」としてがんと向き合うことができた。また、他者との意見交換を通して、さらに考えを深めていた。

２．事業の達成度について

①推進校における生徒アンケートより（対象：中・高校生 150 名）

質問項目等		実施前	→	実施後
1)a	「がんの学習は健康な生活を送るために重要だ」 ※「そう思う」と回答	83.3%	→	96.7%
3)d	「がん検診を受けられる年齢になったら、検診を受けようと思う」 ※「そう思う」と回答	54.0%	→	74.7%
⇒がんを自らのこととしてとらえ、がんを学ぶことの必要性を感じることができた。また、今後の健康な生活と関連付けて考えることができたと思われる。				
3)f	「がんになっても生活の質を高めることができる」 ※「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答	50.0%	→	66.6%
3)h	「がんと健康について、身近な家族から語ろうと思う」 ※「そう思う」と回答	44.1%	→	70.3%
⇒ がん患者に対する正しい認識や共生の視点等について理解し、自他の生き方（特に家族等の身近な人たち）について考えを深めることができたと思われる。				

②研究授業参加者アンケートより（対象：管理職６名、教諭等 15 名、養護教諭等３名、その他８名）

	A	B	C	D
研究授業について	74.2%	25.0%	3.1%	
授業整理会等について	74.2%	25.8%		

Ａ：とても良かった、とても参考になった　　Ｂ：良かった、参考になった
Ｃ：あまり良くなかった、あまり参考にならなかった　　Ｄ：良くなかった、参考にならなかった

推進校の生徒にとって、がんに関する知識等については、授業者及び外部講師が準備した資料等の活用もあり、事業実施前より確実に定着を図ることができた。また、授業でのグループワークや外部講師との対話を通して、命の大切さや共生の視点等についても理解を深め、自他の生き方等について考えることができたと思われる。授業で学んだ知識を活用するといった点で、家庭で家族と話すことにより、知識の定着はもちろんのこと、生徒や家族を含め、よりがんについて学びを深めることができた。

また一部の学校において、ＷＥＢ会議システムを使っての打合せや、ＩＣＴ機器を活用した他学年との情報共有など、打合せや授業の実施において幅広い可能性を感じられた。

推進校以外の先生方への普及については、がん教育講習会をオンデマンド開催したことにより、中央講師による講演や、本県指導主事による説明等を幅広く視聴していただけた。また推進校による実践報告書等を教職員専用サーバーに掲載することで、広く周知することができた。

３．今後の課題（今回の事業により新たに見えた課題など）

●指導内容等の一層の啓発（外部講師を活用したがん教育について）
●外部講師活用リストの周知、外部講師派遣についての効果的かつ効率的な運用
●外部講師の育成（校種に合った指導内容等）
●ＷＥＢ会議システムを活用した打合せや授業実践

４．モデル校以外での取組について（課題や今後整理すべき事項など）

・作成した外部講師リストを活用し、各校への外部講師の派遣を行っていく。その中でさらに効率的・効果的に活用できる体制を模索し改善していく必要がある（外部講師の選択や申込方法等について）。
・地域に密着した外部講師の確保ということで、さらなる外部講師リストへの登録を募り、外部講師を活用しやすい体制づくりを引き続き行う。

令和３年度

がん教育総合支援事業　事業成果報告書

地方公共団体名	岐阜県

１．事業の具体的内容について

（１）自治体における取組

① 協議会について

１．構成員　１４名

医師会１名（内科医）、がん拠点病院１名（がん専門医）、大学教授２名、
県健康福祉部保健医療課１名、がん経験者２名、養護教諭２名、
モデル授業校授業者（高等学校保健体育科教諭、中学校保健体育科教諭）２名
県教育委員会体育健康課事務局３名

２．開催時期、検討内容

■第１回推進協議会　【令和３年９月２８日（火）岐阜県総合教育センター　⇒ＷＥＢ開催】

〇令和２年度の「がん教育」の実施状況について

〇令和３年度の「がん教育」の推進について

〇外部講師の確保について

〇今後の学校における「がん教育」の推進について

■第２回推進協議会　【令和４年１月１９日（水）岐阜県総合教育センター　⇒　ＷＥＢ開催】

〇令和３年度の「がん教育」の実施状況について

・外部講師を活用したモデル授業のビデオ視聴

・実施前後のアンケート結果を踏まえた意見交流

・「外部講師を活用したがん教育モデル校」の実践の成果と課題について

〇令和４年度の学校における「がん教育」の推進について

・「外部講師を活用したがん教育」指導者研修会

・保健体育科教諭を対象にした研修

② 教育委員会としての取組

■令和３年度　がん教育指導者研修会　【令和３年７月２８日　⇒　ＷＥＢ開催】

〇岐阜県のがん教育の現状について

〇講話①「二人に一人はがんになる　－がんと闘う・がんと共に生きる－」
岐阜大学医学部講師兼岐阜大学医学部附属病院医師　田中　善宏　氏

〇講話②「学校におけるがん教育について」
大垣市民病院　副院長　進藤　丈　氏
がん哲学外来メディカルカフェ　シャチホコ記念　彦田　かな子　氏

■岐阜県図書館所蔵の教員向け「がん（教育）関連資料リスト」の紹介

〇コロナ禍により、夏季休業期間中に企画していた啓発イベントの開催が中止となったため、がん教育指導者研修会において、県立図書館所蔵の資料リストを紹介するとともに、リストのデータを研修会資料として配布した。

■モデル校を指定した授業実践（中学校４校、高等学校３校）

〇外部講師を活用したがん教育のモデル校として、中学校４校、高等学校３校を指定し、授業実践に取り組んだ。昨年度の実践の課題を踏まえ、保健体育科教諭（TI）と医師（T2）による TT での授業を行った。

中学校	高等学校
◇垂井町立垂井北中学校【西濃地区] 外部講師：古井医院　院長 ◇本巣市立真正中学校　【岐阜地区] 外部講師：岐阜大学医学部附属病院 ◇美濃加茂市立西中学校【可茂地区] 外部講師：木澤記念病院 ◇垂井町立不破中学校　【西濃地区] 外部講師：古井医院　院長	◇岐阜県立斐太高等学校【飛騨地区] 外部講師：高山赤十字病院 ◇岐阜県立恵那高等学校【東濃地区] 外部講師：県立多治見病院　緩和ケア医師 ◇岐阜県立郡上高等学校【美濃地区] 外部講師：中濃厚生病院　緩和ケア医師

③　保健部局や地域の専門機関等との連携

・県健康福祉部保健医療課に依頼して、「学校におけるがん教育推進協議会」の委員に就任していただき、協議会で助言をいただくとともに、がん診療連携拠点病院やがん経験者団体などの外部講師の候補者を紹介していただいた。

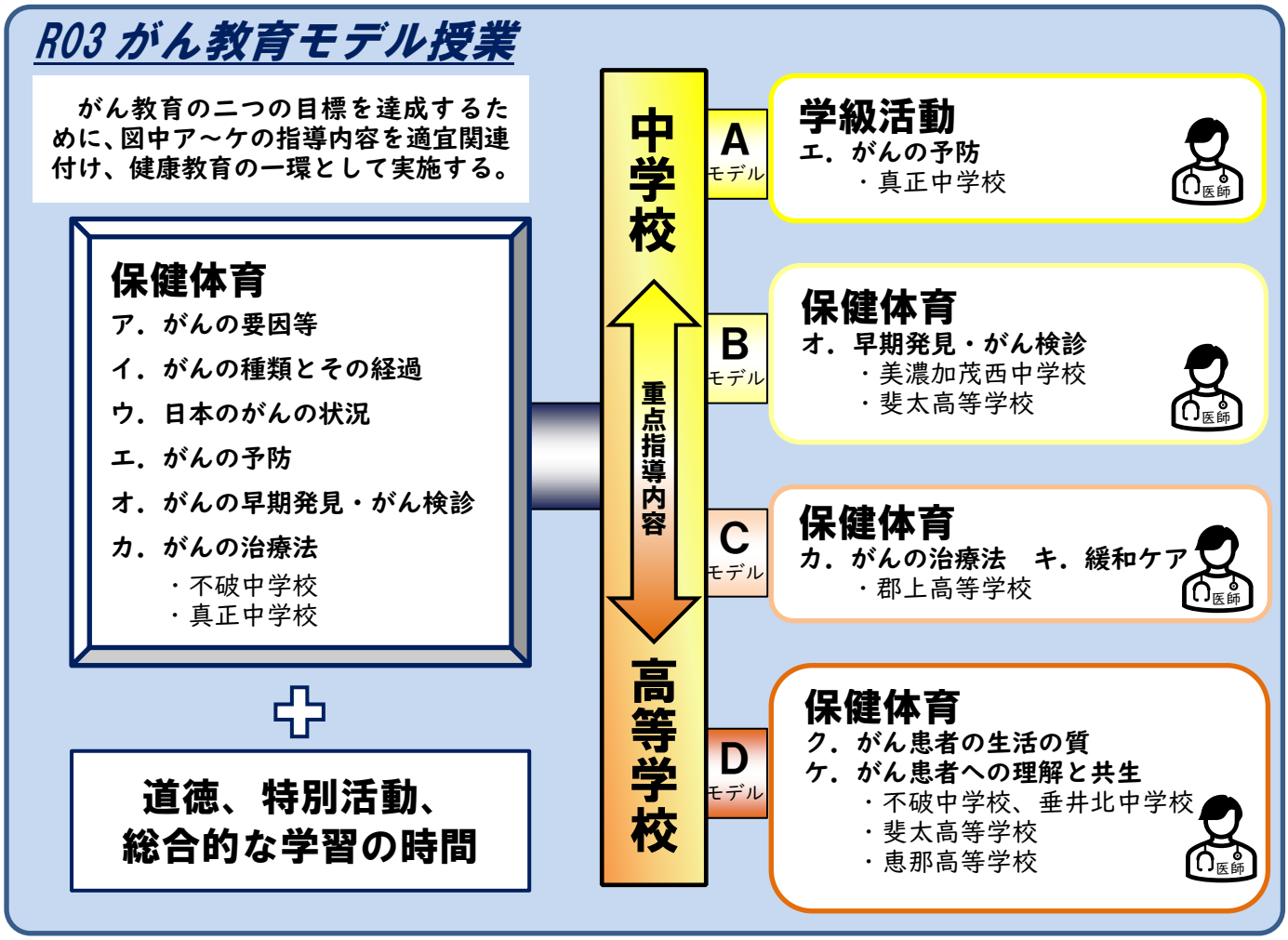
・保健医療課が主催する「岐阜県がん対策推進会議」に参加し、第三次岐阜県がん対策推進計画における「学校におけるがん教育」について関係機関と共通理解を図った。

・県内の中学校、高等学校の数に対して、外部講師が十分に確保できていないことから、保健医療課からがん診療連携拠点病院への協力者リストアップを依頼していただいた。

（２）モデル校における取組

【内容】・中学校４校、高等学校３校をモデル校として指定し、授業実践を通して、外部講師を活用したがん教育のモデル授業案を作成する。

・作成したモデル授業案を保健体育担当教員や養護教諭の研修会等で周知するとともに、ＨＰに掲載し、活用を促す。



■外部講師を活用したがん教育モデル授業　授業研究会

○令和３年１１月１６日（火）　岐阜県立斐太高等学校　１年Ｃ組　保健体育　**Bモデル**

【単元名】がん患者とともに生きる社会に向けて

＜授業の展開（１時間目）＞

１　「がん」について抱くイメージについて（交流）

２　がんの仕組みについて

⇒医師(T2)：誰もがなり得る可能性があり、原因として不明なものもあることを具体的に説明していただいた。

３　がん検診の種類や受診することの意義、受診率について

⇒医師(T2)：がん検診の意義や、岐阜県のがん検診受診率の現状について最新のデータを基に説明していただいた。

ICT 機器の活用による仲間との多面的・多角的な追究

４　タブレット端末を用いた調べ学習（テーマ別追究）

テーマＡ：どうしてがんになってしまうのか

テーマＢ：なぜ、がん検診を受ける人が少ないのか

テーマＣ：がんになりにくくするためには

５　発表

＜授業の展開（２時間目）＞　**Dモデル**

１　（著名人）さんは、生活習慣に問題があって白血病になったのだろうか

２　ＡＹＡ世代のがんについて

３　身近な人が「がん」になったとき、自分には何ができるか

Ａ：家族ががんになったら

Ｂ：自分の恋人ががんになったら

Ｃ：自分ががんになったら

４　がん患者が暮らしやすい社会について

⇒医師(T2)：全体で各グループの発表を交流した後に、がんの治療法、社会復帰するまで、がん患者が暮らしやすい社会について、実例をもとにお話ししていただいた。

外部講師（医師）からの即時評価

〔**外部講師の活用上の留意点**〕

・**教諭（TI）の説明に対する補足説明**や**生徒の考えに対する即時評価やアドバイス**を行う T2 として参加していただく TT 授業形式とした。

・がんの原因は生活習慣以外にもあることや、原因がはっきりしていない場合もあること、また、早期発見、早期治療ができれば、多くの場合、治る病気であることを、**専門医である医師がおさえることで、生徒が誤った認識や不安をもつことがないようにした。**

・**最新の治療法や県内がん検診受診率等のデータ例に説明**していただくことで、**生徒の関心を高め、正しい情報の理解に基づいた思考・判断・表現ができるようにした。**

○令和３年１２月１４日（火）　岐阜県立恵那高等学校　保健体育　**Dモデル**

【単元名】がんへの向き合い方「自分らしく生きる」

＜授業の展開＞

１　「がん」とはどのような病気だったか振り返る

２　緩和ケアについて

⇒医師(T2)：緩和ケアは終末期ケアではないこと。治療と並行してがんと診断されたときから、場合によっては亡くなった後の遺族へのケアも含めて、がん患者とその家族に対して苦痛を和らげるよう支援するものであることを補足説明。

３　もし、身近な人ががん宣告を受けたら、あなたには何ができますか？

４　もし、あなたががん宣告を受けたら、どう感じますか？

⇒医師(T2)：グループディスカッションに加わっていただき、価値付けや、問いかけによって、発言の根拠となる見方や考え方を引き出していただいた。

5　もし、あなたが余命半年を宣告されたら、残された時間をどう過ごしていきたいですか？

6　闘病生活を乗り越え、「自分らしく」やりたいことをやり遂げた著名人の紹介

7　「自分らしく生き抜いた」ある方のこと

⇒医師(T2)：過去に治療を担当された患者さんの闘病の様子を基に、「自分らしく生き抜く」ということについてお話していただいた。

外部講師（医師）の問いかけや即時評価による思考の深まり

〔外部講師の活用上の留意点〕

・ディスカッションに加わっていただき、**生徒の意見の価値づけや、根拠の問いかけなどによって、生徒の多面的・多角的な思考を促し**、「自分らしく」生きることについての自分なりの考えをもつことができるようにした。

・ディスカッションでの**生徒の発言を取り上げ、位置づけ・価値づけを行いながら説明（補足や修正）**をしていただくことによって、生徒が**自己とのかかわりで主体的に考え、「自分らしく」生きることについての考えを深めることができるようにした。**

○令和３年１２月１５日（水）　岐阜県立郡上高等学校　保健体育　**Cモデル**

【単元名】生涯を通じる健康（医療制度とその活用）

＜授業の展開＞

1　前回の復習

2　治療法を選択する上で何を重視するか（ディスカッション）

Case１　４５歳既婚　子供二人　７５歳の母と同居

Case２　３０歳独身　仕事に力を入れている時期

3　インフォームドコンセント・セカンドオピニオンについて

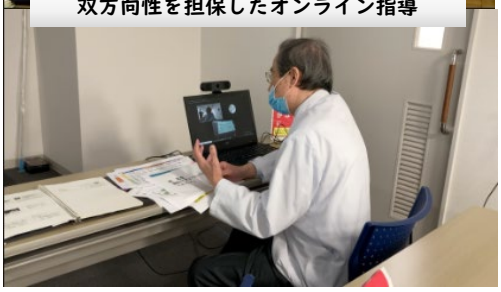
4　緩和ケアについて

⇒医師(T2)：治療説明の現状や配慮していること、緩和ケアについて解説していただく。

5　中濃厚生病院でのがん患者支援の実際について

⇒医師(T2)：患者によって重視したいことは異なり、あらゆる面を考慮し、納得して治療法を選択していく必要がある。

双方向性を担保したオンライン指導



〔外部講師の活用上の留意点〕

・感染防止対策によって**学校に赴くことが難しい場合**に加え、今後、**遠隔地における指導**も視野に、**双方向性を担保したオンライン形式で指導していただいた。**

○令和３年１１月１９日（金）　本巣市立真正中学校　保健体育

令和３年１２月　２日（木）　垂井町立不破中学校　保健体育

【単元名】健康な生活と病気の予防

＜授業の展開＞

1　日本のがんの現状について

2　がんの発生について

3　がんの治療法について

4　がんになりにくくするためにできること

5　がん検診の有効性について

6　アンケートへの記入（さらに知りたいこと）

感想やアンケートのオンライン入力

〔**外部講師の活用上の留意点**〕
・**次時の指導効果を高めるため**に、がんに関する理解を重点とする１時間目の終わりにアンケートを記入する時間を設け、その**内容を集約して外部講師（医師）に伝え、生徒の実態を踏まえた意図的な指名や資料作成上の参考となるようにした。**

○令和３年１２月９日（木）　美濃加茂市立西中学校　保健体育　**B**モデル
【単元名】生活習慣病の予防『がんの予防』ヘルスプロモーション
＜授業の展開＞
１　生徒の質問に基づいた医師からの説明
・がんの原因には、生活習慣以外に何があるか
・がんに罹ってしまうと、体はどのような状態になるか
・身内ががんにならないため、または、なってしまったときにできるサポートはあるか
⇒医師(T2)：質問をした生徒の名前を紹介しながら、具体的な事例やデータを用いた資料を用いて、前時の学習内容への理解を深める説明をしていただいた。

生徒の関心や疑問に沿った外部講師（医師）の説明

２　がんとの向き合い方を考える
・医師からの説明を聞いて、さらに疑問に思ったことや知りたいことを質問する。
３　医師からのメッセージ
⇒医師(T2)：事前質問の内容や、授業での生徒の学ぶ姿についてお話していただき、がんの予防について考えることの意義について深く考えることができるようにした。

〔**外部講師の活用上の留意点**〕
・本時までに学習している内容や、生徒の質問を事前にお渡ししておくことで、**生徒の実態を踏まえたお話をしていただき、生徒が自分との関わりで主体的に追究できるようにした。**
・さらに知りたいと思ったことを質問し、その質問にその場で答えていただくことで、生徒の関心に寄り添った説明を引き出し、生徒の理解をより深めることができるようにした。

○令和３年１２月７日（火）　本巣市立真正中学校　保健体育　**A**モデル
【単元名】健康な生活と病気の予防
＜授業の展開(第１時)＞
１　生徒の質問に基づいた医師からの説明
・がんについて
・予防法について
・その他（がん検診の有効性、治療や副作用・治癒率、身近な人ががんになったら）
⇒医師(T2)：質問をした生徒の名前を紹介しながら、具体的な事例やデータを用いた資料を用いて、前時の学習内容への理解を深める説明をしていただいた。

２　自分や家族が、がんになりにくくするための生活習慣づくりについて

⇒医師(T2)：グループのディスカッションが活発になるように、生徒の疑問にその場で答えていただいたり、具体を引き出すための問いかけをしていただいたりした。

3　全体交流

⇒医師(T2)：生徒の発表内容を整理し、望ましい生活習慣づくりのために重要なことをまとめていただいた。

4　がんになりにくくするためにできること

⇒医師(T2)：「3　全体交流」の内容を集約したスライドを示しながら、生徒が考えた内容について助言していただいた。

外部講師（医師）による生徒の発言の集約と即時評価

〔外部講師の活用上の留意点〕

・前時の学習内容や、生徒のアンケートを事前にお渡ししておき、**生徒の実態を踏まえてお話ししていただくことで、生徒が自分との関わりで主体的に追究できるようにした。**

・画用紙に書き出しながら話し合うことによって、**画用紙に書かれた内容や生徒の様子を見ながら、外部講師が意図的に問いかけや補足説明等の関わりができるようにした。**

○令和３年１２月１６日（木）　垂井町立不破中学校　学級活動　**D**モデル

【単元名】がんと向き合う

＜授業の展開＞

1　前時の振り返りと講師の紹介

⇒医師(T2)：冒頭に「２人に１人はなり得る「がん」という病気は一人で背負うにはあまりに重く、その重みについて一緒に考えることで、支え合うための心構えをつくる時間にしよう。」と生徒に語り掛け、学習の方向付けをしていただいた。

2　もし古井先生（医師）から「がんです。」と宣告されたら、どんな気持ちになるか（交流）

3　映像資料「文部科学省『がんとともに生きる』エピソード１がん経験者（長谷川さん）」を視聴

4　長谷川さんの生き方についてどう思うか（交流）

5　講師の説話による単元のまとめ

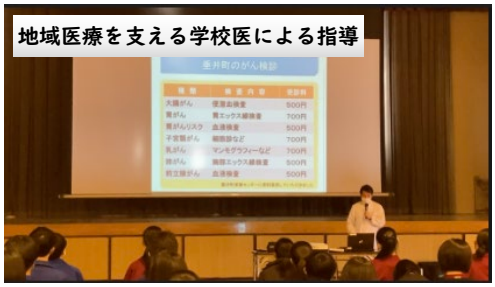
①生徒の発言から感じたこと

②最新のがん治療と、今後期待される治療法

③心に響いたがん患者の言葉

④垂井町内の「がん検診」受診率の向上、普及に向けて中学生に期待すること

⇒医師(T2)：学校医という立場から、学校における健康教育と関わらせながら、具体的な事例を挙げてお話ししていただくことで、様々な人々が協力して健康な暮らしをつくりあげていくことの大切さを理解できるようにした。



地域医療を支える学校医による指導

〔外部講師の活用上の留意点〕

・前時の学習内容や、生徒のアンケートを事前にお渡ししておき、**生徒の実態を踏まえてお話ししていただくことで、生徒が自分との関わりで主体的に追究できるようにした。**

・**学校医という立場**から、１年時の防煙教室や３年時の性講話等、**学校における保健教育と関わらせてお話しいただく**ことで、生徒が身に付けている知識等を関連付ける思考を生み出し、**「がんの予防」について深く理解することができるようにした。**

・**学校医という立場**から、垂井町のがん検診の受診率や、近隣の病院での先端医療の紹介など**具体的に話をしていただくことによって、生徒がより自分との関わりで主体的に考えることができるようにした。**

２．事業の達成度について

（１）がん教育モデル授業　指定校意識調査（一部抜粋）　対象：４中学校４３５人、３高等学校２６３人
モデル校の生徒に対する事業前と事業後の意識の変容は以下のとおりである。

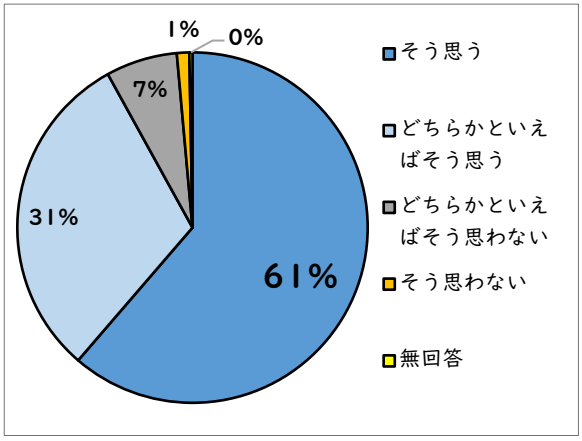
①　がん検診を受けられる年齢になったら、健診を受けようと思う。

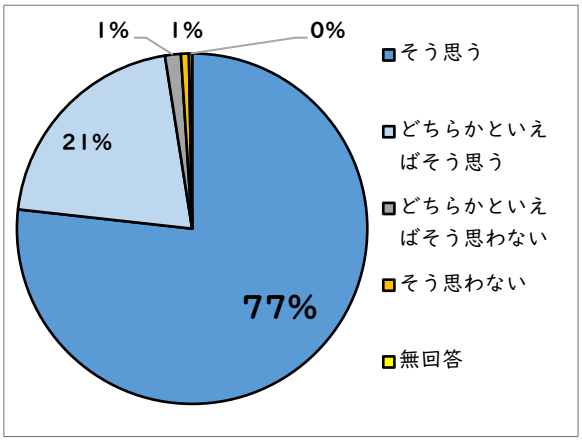
〔事業実施前〕　（単位:人）

そう思う	428
どちらかといえばそう思う	214
どちらかといえばそう思わない	46
そう思わない	8
無回答	2

〔事業実施後〕　（単位:人）

そう思う	525
どちらかといえばそう思う	142
どちらかといえばそう思わない	10
そう思わない	5
無回答	2





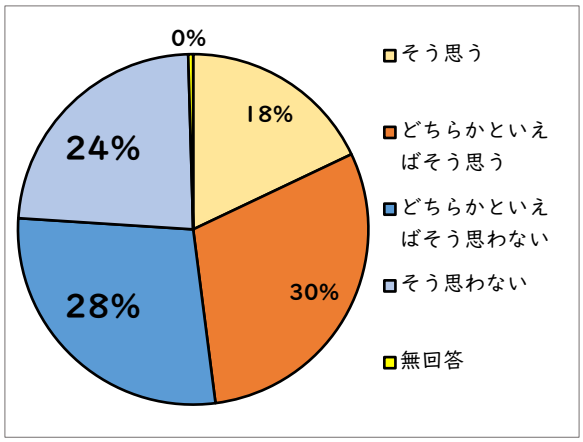
②　がんの治療方法はいくつかあるが、医師が決めるものである。

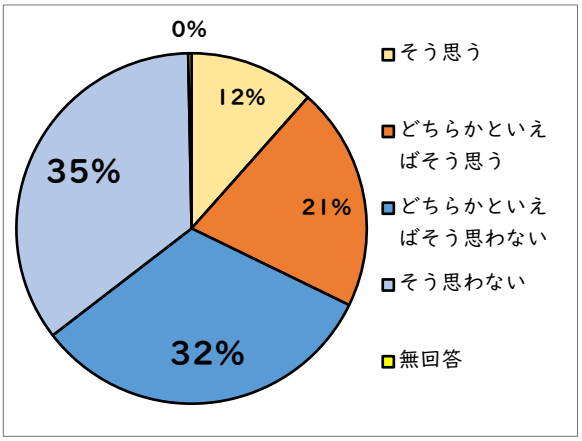
〔事業実施前〕　（単位:人）

そう思う	119
どちらかといえばそう思う	199
どちらかといえばそう思わない	186
そう思わない	156
無回答	3

〔事業実施後〕　（単位:人）

そう思う	75
どちらかといえばそう思う	134
どちらかといえばそう思わない	210
そう思わない	228
無回答	2





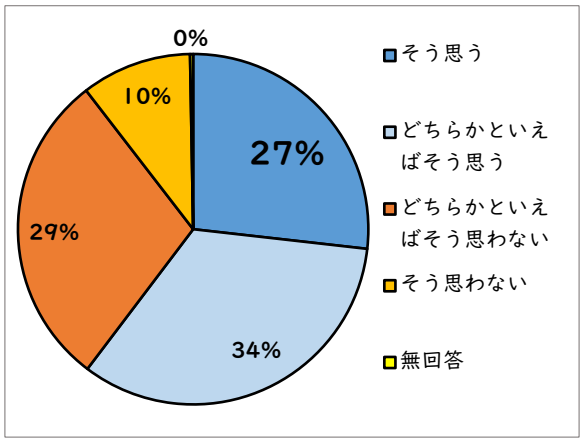
③　がんになっても生活の質を高めることができる。

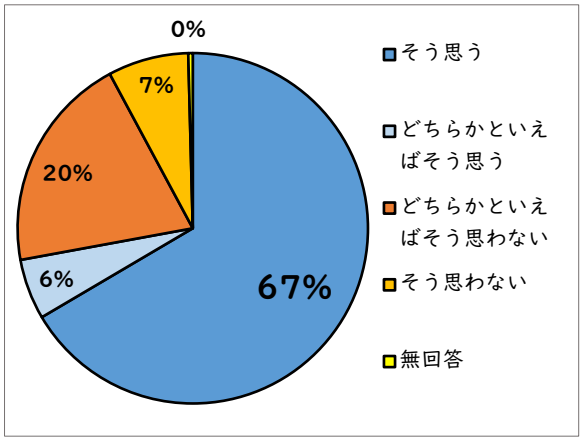
〔事業実施前〕　（単位：人）

そう思う	187
どちらかといえばそう思う	234
どちらかといえばそう思わない	204
そう思わない	71
無回答	2

〔事業実施後〕　（単位：人）

そう思う	322
どちらかといえばそう思う	227
どちらかといえばそう思わない	97
そう思わない	36
無回答	2





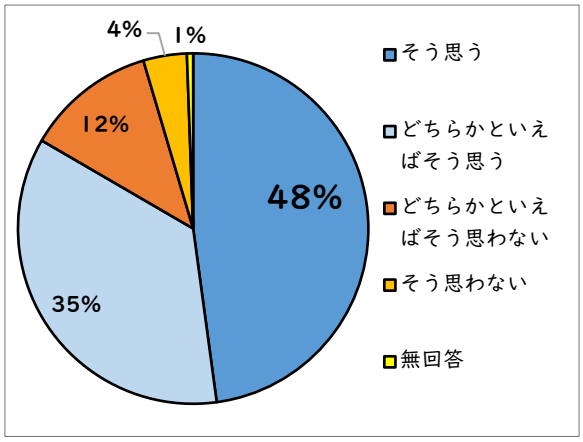
④　がんと健康について、まずは身近な家族から語ろうと思う。

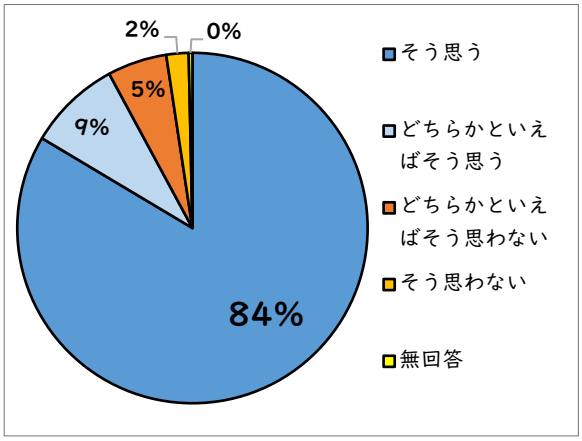
〔事業実施前〕　（単位：人）

そう思う	334
どちらかといえばそう思う	248
どちらかといえばそう思わない	84
そう思わない	28
無回答	4

〔事業実施後〕　（単位：人）

そう思う	488
どちらかといえばそう思う	150
どちらかといえばそう思わない	32
そう思わない	12
無回答	2





（２）生徒の感想

・今年、母に勧められて子宮頸がんワクチンを打ちました。周りの人は打っていなくて、何だか怖かったけど、今日の学習で、母は私の将来のことを考えて勧めてくれていたのだと分かりました。

・やはり、がんは怖い。だから、少しでもがんになるリスクを減らすためにも、生活習慣をよくしたいと思った。でも、原因がわからないがんもあるから、そのときは受け入れて、生きることをあきらめず、治療を続けたいと思いました。

・がんの治療が進歩して、以前よりも患者の負担が減ったということを知って少し安心しました。

・母に、がん検診にかかる費用について話したら、「そんなに安いの！」と驚き、あまり知らなかったようなので、話してよかったと思いました。
・他人事ではないなと痛感しました。まだ身内にがんになった人はいないけど、「心配をかけたくない」、「心配してほしい」等、人それぞれ考え方が違うことを知ったので、もし身内の人ががんになったら、楽しく話をするなど、がんのことを忘れてしまうような接し方をしたいと思った。
・私は、後悔なく、周りに感謝する生き方をしたいです。身近な人ががんになってしまったら、「がん患者＝可哀想」ではなく、その人が最後まで生きていてよかったと思えるように向き合っていきたいし、自分らしく生きていけるように想像力を働かせて、自分にできることをしていきたいと思いました。
・実は、自分の祖父もがんと宣告されました。自分も祖父を支える立場になったので、学んだことを基に、母親と「いっぱいおじいちゃんと話したりして励まそうね。」と話しました。
・母に昨日のことを話して、「もし末期のがんになったらどうする？」と聞くと、「普通に楽しく過ごす。」と答えてくれました。母が私に言った何気ない日常を大切にするということを聞いて、改めて命と時間の大切さを知りました。
・両親に今回習ったことを話して、「がん検診受けている？」と聞いたら、「毎年受けているよ。」と言ったので、安心しました。がんについて家族と話したのが初めてだったので、もっと病気などについて話し合っていきたいと思いました。
・母さんは生活習慣にあまり問題はないけど、父さんは濃い味付けが好きなので、「食べ過ぎたらあかんよ。」と話しました。

（３）評価

外部講師を活用したモデル事業後に実施した意識調査では、「がんの学習は、健康な生活を送るために重要だ」については、「そう思う」と回答した生徒の割合が、実施前の７９％から、実施後に９３％へと１０％以上高まっている。がんの学習の重要性の認識は、行動につながる意識の変化にも表れている。「がん検診を受けられる年齢になったら、健診を受けようと思う」及び「日頃から、バランスの良い食事や適度に運動を行うなど健康な体づくりに取り組もうと思う」について、「そう思う」と回答した生徒の割合が１０％以上高まっている。これらの意識の変化は、実際に治療にあたる医師の説明を聞いたり、医師からの助言や評価を受けながら、がんになりにくい生活習慣について話し合ったりしたことによるものであり、モデル事業を通して、自分の命や健康の大切さに気付き、予防のために今自分ができること、今後できることは積極的にやっていこうという思いをもたせることができた。

また、講師から最新の治療や緩和ケア、がん患者の方々の生き方について話を聞いたことによって、「がんになっても生活の質を高めることができる」の問いに対して「そう思う」が２７％から６７％へと大きく増えたように、がんになっても前を向いて生きていきたい、身近な人ががんになったら支えていきたいという思いをもつことができた。

さらに、「がんと健康について、まずは身近な家族から語ろうと思う」の問いに対して、「そう思う」が４８％から８４％へと高まり、「（２）生徒の感想」にも具体を示したように、モデル授業がきっかけとなり、家庭での家族との会話を通して、がんについての学びを深めることができた。

３．今後の課題及びその取組の方向性（今回の事業により新たに見えた課題など）

○外部講師には、Ｔ２として授業に参加していただき、１時間の授業の中で、何回もお話をしていただけるスタイルで行った。生徒が疑問に思ったタイミングや、生徒の意見に対してすぐにアドバイスをいただけたことは、生徒の理解を深めることに大変有効であった。
○ＴＴでの授業の課題として、どのタイミングでどんな話をしていただくか、指導の効果を高めるための事前の打ち合わせがとても重要である。今年度は、がんについての基本的な理解を主なねらいとする授業を（教科）担任で行い、その授業後の生徒の感想やアンケートを外部講師に伝えておくことで、外部講師に生徒の実態や既習の内容が伝わり、指導内容の重なりが解消され、生徒の実態に即した効果的な指導につながった。また、事前の打ち合わせの時間も大幅に削減された。
○文部科学省作成「がん教育推進のための教材 指導参考資料」をもとに、各学校でアレンジをしてプレゼン資料を作成した。今後は、県のがん検診受診率等のプレゼンを加え、県としてのプレゼン資料をさらに活用しやすいものにしていく必要がある。

４．モデル校以外での取組について（課題や今後整理すべき事項など）
○外部講師の確保については、がん診療連携拠点病院を中心に依頼を進めてきた結果、県内６地区全てで連携を図ることができたが、依然として、学校数に対して対応できる医師の数が少ない。指導資料のさらなる一般化を進め、指導内容・指導方法を示すことによって、学校医等の協力を得やすい環境整備を進めていく。 ○がん患者、がん経験者の方で、協力をいただける方は増えてきたものの、実際に外部講師として授業に参加した経験のある方は少なく、指導することに不安を抱く方も多い。コロナ禍では難しい面もあるが、実際の授業を参観する機会を設けたり、授業の様子を撮影した動画を用いた研修を実施したりするなど、指導者研修を充実させていく。 ○保健医療課の協力のもと、医師・看護師の外部講師リストを作成中であり、今後も連携してリストの更新をするとともに、各市町村や学校が直接外部講師に依頼していけるような体制づくりを進める。

令和３年度

がん教育総合支援事業　事業成果報告書

地方公共団体名	静岡県

１．事業の具体的内容について

（１）自治体における取組

①　協議会（検討会）について

１．構成員

・全員で 16 人
医師１人（静岡県医師会副会長）、がん経験者２人（元学校関係者）、対がん協会１人、患者会１人、行政１人（健康福祉部疾病対策課長）、モデル校２人（高等学校教頭、中学校教頭）、総合教育センター指導主事２人（高校保健体育、中学保健体育）、教育事務所２人（養護教諭）、教育委員会事務局４人

２．開催時期、検討内容

＜第１回＞
期日：令和３年７月 19 日（月）
場所：静岡県庁
内容：事業概要の説明、モデル校における実施計画、がん教育の実践紹介（外部講師としての実践、患者会としての実践）、静岡県の現状と課題

＜第２回＞
期日：令和４年２月 14 日（月）
場所：静岡県男女共同参画センター
内容：事業報告、モデル校における実践報告、外部講師を活用したがん教育の取組の推奨について、成果と課題

②　教育委員会としての取組

＜がん教育における外部講師派遣可能病院一覧の更新と周知＞
・外部講師派遣可能病院一覧（令和元年度作成）の更新を行い、県立学校に周知し、その活用を推奨した。外部講師派遣を希望する学校に対して県教育委員会が窓口となり、医療機関と学校をつなぐ役割をした。
・特別支援学校や定時制課程で、外部講師を活用したがん教育を行うことができた。

＜事業成果の普及＞
・令和３年度養護教諭指導リーダー研修第２回研修会
日時：令和４年２月 24 日（木）
対象：養護教諭指導リーダー　（参加者 33 人）
方法：オンライン開催
内容：令和３年度がん教育総合支援事業モデル校における「教育活動全体をとおしてがん教育に取り組んだ事例」と「養護教諭としてがん教育の推進にかかわった事例」から、今後のがん教育の推進について協議した。
・体育主任研修会（５月）、養護教員研修会（８月）、保健主事研修会（９月）
内容：令和２年度がん教育総合支援事業におけるモデル校の取組について「がん教育実践報告」を行った。発表者は、各研修会の対象者に合わせ、それぞれの役職によるがん教育へのかかわり方を中心に実践報告をした。

③　保健部局や地域の専門機関等との連携

＜県健康福祉部医療局疾病対策課がん対策班との連携＞
・「静岡県のがんの現状と対策」について、資料提供と説明を依頼した。

＜がん教育外部講師派遣可能病院一覧の活用＞
・保健主事研修会で、がん教育における外部講師派遣可能病院一覧から講師を依頼し、「がん」についての知識を深め、学校におけるがん教育の推進について考える機会を設定した。

（２）モデル校における取組

＜静岡県立伊豆総合高校土肥分校＞

○目標

・生徒が「がん」の予防と早期発見の大切さについて理解して健康な生活を実践するようになる。

・自他の健康や命を大切にできるようになる。

○取組の内容

対象	実施時期	実施科目等	内容
委員	９月	生徒保健委員会	がんのイメージ、がんについて知っていること、今後学びたいことなどの意見をとりまとめた。 疑問点等は、学校医に質問した。
１年	10 月	国語総合	小説「サイレント・ブレス」の一部を読み、主人公のがん患者の最期の迎え方やその周りの家族などはどのように接するべきかを考えた。
全校生徒	11 月	がん教育講座①	講演：「がんの基礎知識とがんの予防について ～がん患者さんからのギフト～」 講師：順天堂大学医学部附属静岡病院 主任看護師　渡邉　美佐子　氏
１年	11 月	保健	がん教育講座①の振り返り
１年	12 月	家庭総合	「がんを防ぐための 12 か条」 一日の献立の野菜の量を考える。
全校	12 月	がん教育講座②	講演：「いのちのホームルーム」 講師：元御殿場西高校校長　菊池　基　氏
全校		薬学講座	講師：学校薬剤師 内容：タバコとがんの関係性
１・３年		社会	「がん等の病気への備え～保険の授業～」
委員	１月	生徒保健委員会（本校分校生徒交流）	
全校	１月	学校保健委員会	一年間の活動報告
全校	毎月	保健だより	保健だよりに「がん教育クイズ」を連載し、各クラスの保健委員がクイズの出題と解説をした。 参考文献：「よくわかる！がんの授業」文部科学省選定　がん教育アニメ教材

生徒の感想

周囲の人ががんになってほしくないし、自分もなりたくないので、検査を受けたり生活習慣を見直したり、今日の話を家族に話したりして理解を深めたいと思った。がんの種類や治療方法を知ることができ、またがんによって治りやすいものと治りにくいものがあることを知れてよかった。(２年)

一番心に残った言葉は、いのち＝時間です。私たちはいつ死ぬか分かりません。がんにならないとも言い切れません。だからこそ１分１秒を大切にしていきたいと思いました。(１年)

＜藤枝市立青島北中学校＞

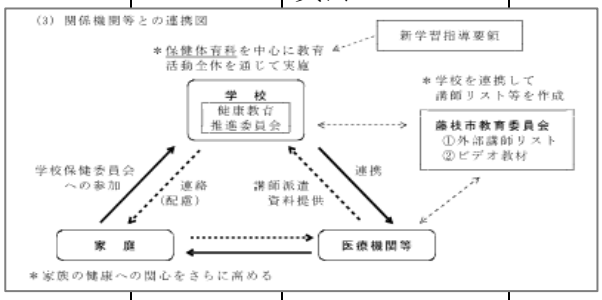
○目標

・健康について関心をもち、病気について正しい理解をもつ。

・共に生きる社会づくりを目指して、自分ができることを考えられるようにする。

○取組の内容

対象	実施時期	実施科目等	内容
教職員	７月	健康教育推進委員会	メンバー：校長、教頭、教務主任、養護教諭（兼保健主事）、保健体育主任、道徳主任（道徳教育推進教師）、保健体育科 関係機関と連携を図り、健康教育（がん教育）を推進するための体制を整えた。
全校生徒	７月	薬学講座	講師：学校薬剤師 内容：自分で心身の健康管理ができる大人になるために大切なこと。
教職員	８月	職員研修	講義：「がんという病気をどうとらえるか？」 講師：藤枝市立総合病院 緩和ケア科 吉野　吾朗　氏
全校生徒	10 月	健康教育講演会（学校保健委員会）	講演：「いのちのホームルーム」 講師：元御殿場西高校校長 菊池　基　氏
	10 月	図書コーナーの設置	図書室に健康教育コーナーを特設した。 図書館司書の協力を得て、藤枝市立図書館から多くの関連書籍を借用した。
全校生徒	11～12 月	朝読書 （8:05～8:15）	モジュール活動 健康に関する資料や新聞記事等を読んで、感想や意見をグループで交流をする活動を全６回行った。 講師：NIE コーディネーター　矢澤　和宏　氏 （第１回目）
２年	11～12 月		保健体育 「健康な生活と疾病の予防 ～生活習慣病などの予防～」 （公開授業）

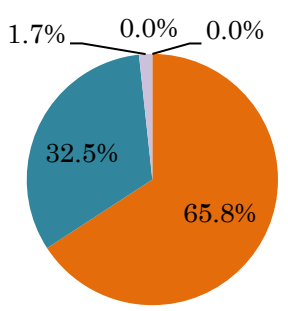
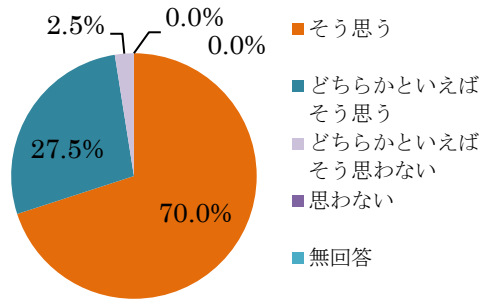
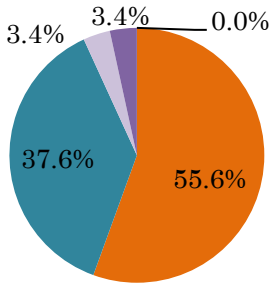
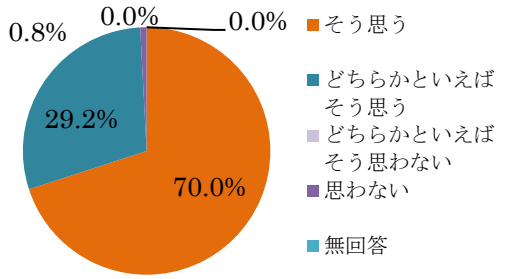
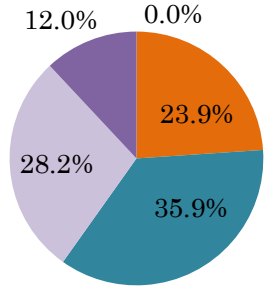
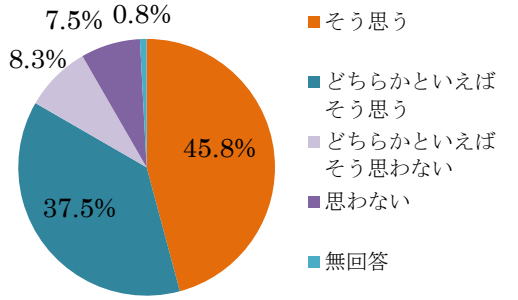


２．事業の達成度について

（１）モデル校における取組について

「がん教育」の取組が健康について考えるきっかけとなり、自分の健康への関心を高めるとともに、家族などの身の回りの人たちの健康に対する意識を高めることができた。

＜アンケート結果より抜粋＞

項目	実施前	実施後
がん検診を受けられる年齢になったら、検診を受けようと思う。		
がんになっている人も過ごしやすい世の中にしたい。		
がんと健康について、まずは身近な家族から語ろうと思う。		

（２）検討会事後アンケート

○協議会（検討会）として十分な支援が行えた（56.3%）
行えなかった（25.0%）
無回答（18.8%）。

・モデル校の取組を参観する機会は得られたが、もっと広く学校現場のがん教育に関する声に触れる機会が得られると良かった。
・直接支援を行う場面はなかったが、高等学校における「がん講座」を参観し、系統的ながん教育の構築について考えるきっかけになった。
・モデル校の取組により、「がん教育」を通して、幅広い視野で生涯の健康について考えることができるということがわかった。協議会（検討会）も、医療、看護、福祉等、幅広い種別から委員を構成することにより、学校におけるがん教育の推進に向けてのアプローチの幅も広げることができる。
・学習指導要領に基づき「がん教育」を実施するにあたり、現場の取組状況や課題などを検証する場が必要である。がん経験者やその御家族又は御遺族の声などから授業で配慮すべきことなどについて検討し、協議会（検討会）として、県の目指すがん教育の指針が示せるよう協力したい。

３．今後の課題及びその取組の方向性（今回の事業により新たに見えた課題など）

（１）外部講師を有効に活用して、ねらいに沿った「がん教育」を実施する。

・がん教育外部講師派遣可能病院一覧表を定期的に更新し、最新情報を各学校に提供する。
・対がん協会、患者会等との連携を持続し、がん経験者等の外部講師リストを整理し、随時更新をする。
・学校に対して外部講師活用の手引きを周知し、外部講師を活用したがん教育の実施を推奨する。
・外部講師を活用したがん教育の実践事例をまとめ、学校及び関係者、関係機関への啓発資料として活用することにより、ねらいに沿ったがん教育の実施につなげる。
・外部講師対象の研修会を企画し、学校におけるがん教育のねらいについて共通理解を図り、外部講師としての心構えや学校との連携の仕方、配慮事項等について確認する。
・教職員や外部講師等の関係者合同研修会を企画し、共通理解を図り、連携体制を構築する。

（２）「がん教育」を学校保健計画に位置付けて、学校教育活動全体を通して組織的、計画的に実施する。

＊第３次静岡県がん対策推進計画では、学校保健計画に位置付けてがん教育を実施した小学校・中学校・高等学校の割合 100％を目指しています。

・体育主任、保健主事、養護教諭を対象とした研修会等で、学校保健計画に位置付けることの意義を伝える。
・保健主事を対象とした研修会では、学校保健計画への位置付けを例示し、各学校の実情に応じて、組織的、計画的にがん教育が実施できるようにするための保健主事の役割を確認する。
・学校保健計画に位置付けたがん教育の実施状況を把握する。

（３）協議会（検討会）委員の役割を明確化する。

・教員や外部講師対象の研修会において、委員の種別を生かした情報発信をする機会を設定し、講師としての役割を担う。
・モデル校におけるがん教育の実施にあたり、各委員が積極的にサポートできるよう、特に第１回目の検討会では、協議の時間を十分に確保する。
・外部講師を経験している委員を講師として、外部講師対象の研修会を企画する。

４．モデル校以外での取組について（課題や今後整理すべき事項など）

（１）「がん教育における外部講師派遣可能病院一覧」「がん経験者外部講師リスト」の整備

県内の学校における外部講師活用事例を紹介し、外部講師を積極的に活用できるように情報提供をする。

（２）外部講師活用に係る諸経費の予算化

本事業における予算内で、外部講師活用に係る諸経費の補助について検討していく必要がある。

令和３年度

がん教育総合支援事業　事業成果報告書

地方公共団体名	愛知県

１．事業の具体的内容について

（１）自治体における取組

①　協議会について

１．構成員

がん教育総合支援事業協議会委員　１５人

（内訳）

県医師会１名、　がん拠点病院医師２名（緩和ケア・疫学研究）

がん患者会１名

県保健医療局１名、

大学准教授１名、

中学校校長１名、

高等学校校長１名、

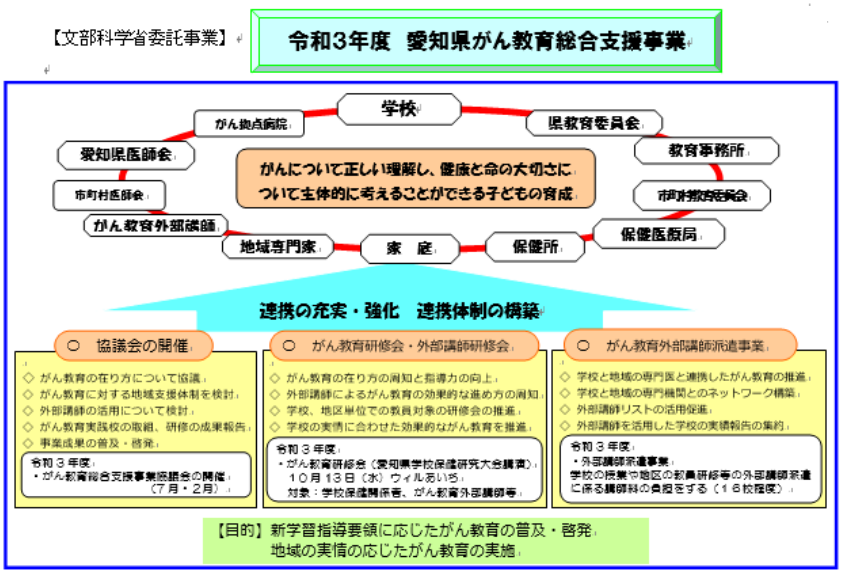
中学校養護教諭１名、

高等学校養護教諭１名、

小中学校 PTA 代表１名、

高等学校 PTA 代表１名

県教育委員会３名



２．開催時期、検討内容

第１回協議会　令和３年７月６日（火）

・事業計画及びその内容等の説明

・県のがん教育の取組状況等の説明

・がん教育の推進に向けての意見交換

第２回協議会　令和４年２月８日（火）※新型コロナウイルス感染症の影響により書面開催

・事業報告

・成果と課題、今後の予定について

②　教育委員会としての取組

ア　がん教育研修会

がんについての正しい知識及び理解を深め、実践につながる機会をつくり、各学校でさらに具体的な取組につなげるため、教職員、医療関係者、がん教育外部講師を対象にした研修会を行った。

《日　　時》　令和３年１０月１３日（水）

《開催方法》　オンライン開催（YouTube によるライブ配信及び 11 月 12 日までの録画配信）

※新型コロナウイルス感染症の影響により集合開催から変更

《講　　演》　「今とこれからを生きる君たちへ　～学びの本質にせまるがん教育～」

講師　埼玉医科大学総合医療センター

緩和医療科／呼吸器外科教授・緩和ケア推進室長　　儀賀　理暁　氏

《参 加 者》　学 校 医　　学校歯科医　　学校薬剤師　　ＰＴＡ代表　　校　長
教　頭　　保健主事　　養護教諭　　学校保健関係者
がん教育外部講師　　がん教育総合支援事業協議会委員

《YouTube 再生回数》　１２９６回

イ　がん教育外部講師派遣事業

・学校や地域の実情に応じたがん教育の推進を図るため、学校での授業や講演、地域の教員研修等に申込みのあった学校（地区）にがん教育外部講師を派遣した。

・保健医療局の協力により作成した「外部講師リスト」を県内の公立学校に周知し、活用により、地域の専門医と学校間のネットワークの構築を目指した。

《派遣事業期間》　：令和３年７月９日～令和３年 12 月まで

《派遣先》　：10 学校（小学校４校、中学校４校、高等学校２校）
３地区（教職員対象研修会）

ウ　研修や教材の周知、事業成果の普及・啓発

・文部科学省主催の研修会や教材、県保健医療局作成の中学生向け「がん教育リーフレット」を学校保健関係者等の研修で周知し活用促進を図った。

・外部講師派遣事業の取組内容を県教育委員会のウェブページや研修会等の機会で周知し、がん教育の先進的な取組について情報を提供し成果を共有した。今後も事業成果の普及に努めていく。

③　保健部局や地域の専門機関等との連携

・毎年、県保健医療局から、がん診療連携拠点病院及びがん診療拠点病院に所属する医療従事者のうち、中学校、高等学校におけるがん教育の実施にご協力いただける方を対象にしたリストを提供していただいている。次年度の行事予定が立てやすいように 12 月にリストを学校に周知している。

《リスト掲載の外部講師：がん拠点病院を中心とした医療従事者 137 名　》

・県保健医療局主催の「県がん対策部会」の事務局として県教育委員会から参加し、愛知県のがん対策の中の、がん教育に関する事項について協議会構成員に対し説明している。

（２）モデル校における取組

実施校 実施日	実　施　事　項
A 小学校 10 月 28 日	テーマ「がんについて知り、今自分にできることを考えよう」（児童対象） 「学校におけるがん教育のあり方について」（教職員対象） 学校保健委員会に外部講師を招き、児童は「がんについて正しい知識を身につけ、生涯、健康な生活を送るために役立てる」をねらいに講演を聞き、教職員は「がん教育への理解を深め、指導につなげる」をねらいに研修及び協議を行った。 【参加人数：６年生児童９６人、教職員 24 人、】
B 中学校 11 月 1 日	テーマ 「『がん』から考える私たちの生活」　（オンライン） 保健体育科の授業後に学校保健委員会「『がん』から考える私たちの生活」を行い、外部講師の話から、「がん」を正しく理解し、生活習慣をよくすることでリスクを下げられることを学んだ。 【参加人数：全校生徒 323 人、教職員 20 人】
C 中学校 11 月 4 日	テーマ「がんについて考えよう」 保健講座のテーマに「がん」を取り上げ、がんについて正しく理解し、健康と命の大切さについて主体的に考えることができることをねらいとし、外部講師の講演を聞いた。 【参加人数：1 年生 73 人、教職員 5 人】

D 高等学校 11 月 11 日	テーマ「がんってなに？がんのことを正しく知ろう」（オンライン） 　総合的な探究の時間（健康教育講座）で「がん教育を通して、がんについて正しく理解する」「自他の健康と命の大切さについて主体的に考え、行動できる生徒の育成」を目的とし、外部講師の講演を聞いた。 【参加人数：１・２年生 624 人、教職員 36 人】
E 中学校 11 月 16 日	テーマ「がんと関わる方から話を聞き、これから自分ががんとどう向き合っていくか考える」 　がんを身近なものと捉え、予防のために自分は今から何をすべきか、これからの生き方やがんとの向き合い方を考えるために学校保健委員会を開催し、外部講師（がん経験者・医療従事者）からの話を聞いた。 【参加人数：2 年生 69 人、教職員 6 人】
F 高等学校 11 月 22 日	テーマ「がんについて考えよう」 　生徒が自らの生活習慣を振り返り、生涯にわたって健康に過ごす意識を高め、がんとの共生社会の中で生きていくうえで必要な正しい知識を身に付けることをねらいとし、特別活動の時間に外部講師からの話しを聞いた。 【参加人数：1 年生 25 人、教職員 4 人】
G 小学校 12 月 2 日	テーマ「がんについて知ろう」 　がんについて学ぶことにより、自他の健康と命の大切さに気付き、生活習慣を見直し、病気の予防や健康の維持増進についての意識向上と行動化を図ることをねらいとし、学校保健委員会で外部講師から話を聞いた。 【参加人数：５・６年児童 61 人、教職員 6 人、保護者 4 人、学校三師 3 人】
H 小学校 12 月 9 日	テーマ「望ましい生活習慣を身につけてがんを予防しよう」 　がんについて体育科で学習した内容を再確認させ、生活習慣の見直しや命の大切さについて考えさせる機会とするため、保健講座を開催し、外部講師の話しを聞いた。 【参加人数：６年生 107 人、教職員 7 人】
Ｉ小学校 12 月 15 日	テーマ「がんについて知り、今自分にできることを考えよう」 　総合的な学習の時間に、外部講師よりがんの基本知識、予防のための生活習慣、検診の大切さ、身近な人ががんになったとき等の話しを聞き、がんに対する理解と、今後の自分の行動を考える機会をもった。 【参加人数：５・６年生 31 人、教職員 6 人】
Ｊ中学校 12 月 16 日	テーマ「性感染症とその予防（子宮頸がん）」（保健体育科） 　　「精一杯『生きる』」（道徳科） 　保健体育科で学んだ「がん教育」「性感染症」のまとめとして外部講師から専門知識や技能を学習し、学級担任による道徳科の授業の２時間を「命と性に向き合う時間」と設定して実施した。 【参加人数：３年生 126 人、教職員 15 人】

（３）その他

外部講師を派遣した地区の教職員研修

実施時期	実　施　事　項
Ｋ地区 8 月 18 日	テーマ「学校におけるがん教育について」（オンライン） 　学校におけるがん教育への理解を深め、実践につながる機会をつくるため、外部講師を招き、がん教育の授業の実践例を具体的に示していただきながら、研修を行った。 【参加人数：西三河管内小中学校　保健主事・養護教諭 124 人】

L市 10月22日	テーマ「がん教育の推進と養護教諭の役割『学校でのがん教育の必要性や行う際の注意点』」 外部講師からどのように学校でがん教育を推進していくことが望ましいか、行う際の注意点等を学び、各学校での実践に向けて、養護教諭としての働きかけや地区として取組を考えるため、研修を行った。 【参加人数：市内小中学校養護教諭68人、校長・指導主事４人】
M市 11月5日	テーマ「子どもたちと一緒に考えるがん教育にむけて」 保健主事を中心に、がん教育について各学校でリーダーシップをとってもらう指導者の育成の機会とした。外部講師の講演を聞き、事例をもとに、学校でがん教育を行う際の配慮や注意するべき点について協議した。 【参加人数：市内保健主事32人】

２．事業の達成度について

（１）がん教育研修会

《成　　果》　YouTube再生回数　　１２９６回

・新型コロナウイルス感染症の影響により、急遽、Web開催に変更したが、集合開催では参加することが難しかった方にも視聴していただくことができた。また録画配信により、繰り返し見ていただくことができた。また、今回は愛知県学校保健研究大会の講演と本研修を兼ねて行ったため、学校医等の学校保健関係者にも参加していただくことができた。

・がん教育に造詣が深く、がん教育外部講師の経験が豊富な医師から、これまでの体験を交えた話を伺うことより、学校関係者、外部講師、保護者等それぞれの立場で、がん教育を行う意義や学校でのがん教育の在り方等を学ぶ機会となった。

（参加者アンケートより）
・がん教育を行う際の配慮事項について見解を聞くことができた。医療者が講師になる授業でも命の授業にすることができるとわかった。
・知識だけでなく、看護師としての自分の経験を伝えていくこともとても大切だとわかった。
・手探りで院外講師を引き受けてきたが、概ね間違っていなかったと安心できた。
・講師の話がとても良かった。今後もこのような研修を毎年続けて欲しい。
・また、このような講演を期待しています。今後、より理解を深めてお役に立ちたいです。
・がん経験者からの話が「がんを自分ごと」として捉えるために大切だと感じるが、直接依頼することは学校も病院も難しい。市のピアサポートに登録している方などの協力が得られるとよいと思う。

（２）外部講師派遣事業

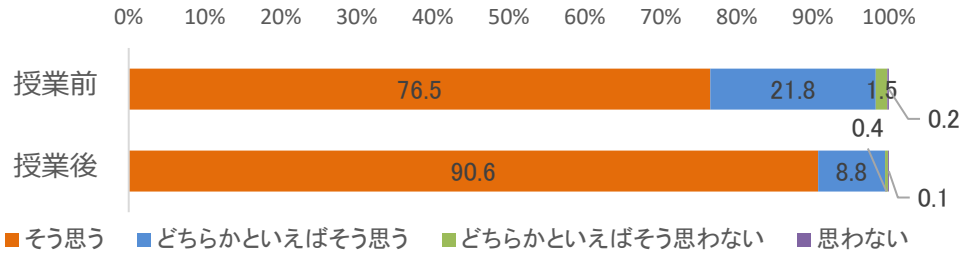
《成　　果》

・がん教育の前後に実施したアンケートによると、「がんについての学習は重要であり、今後の健康生活に役立つ」と回答した児童生徒が約７割から９割に増えた。
・外部講師の指導によりがんに関する知識を身に付け、がんを予防する生活習慣から自分の生活を見直し、健康的な体づくりをしようとする動機付けになった。
・外部講師の話は説得力があり、「早期発見」や「定期検診」に対する意識を高めることができた。
・知識のみでなく、「限りある命を大切にしようとする気持ち」や「大切な人ががんになったら自分になにができるのか」等、がんを自分ごととして考え、生き方を見つめる機会となった。
・学校や地区の教員研修では、外部講師の講話や教員同士の協議により、学校におけるがん教育の在り方や、外部講師との協働・連携について学び、自校でのがん教育実施のイメージを膨らませることができた。

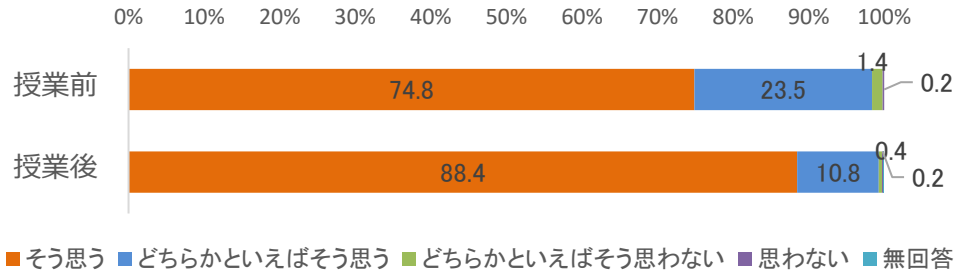
〈がん教育外部講師派遣事業　事前事後アンケート結果より〉

外部講師派遣事業実施校：児童生徒 1424 人

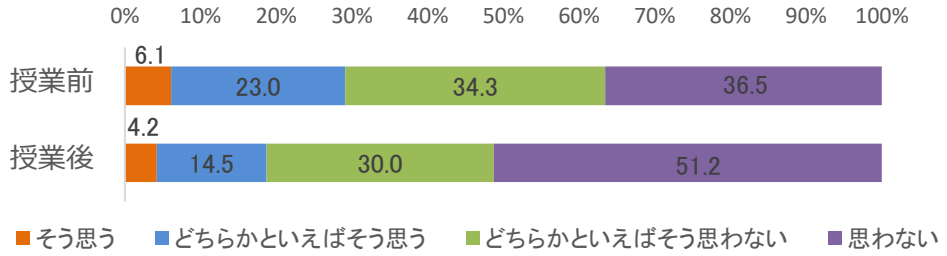
a　がんの学習は、健康な生活を送るために重要だ



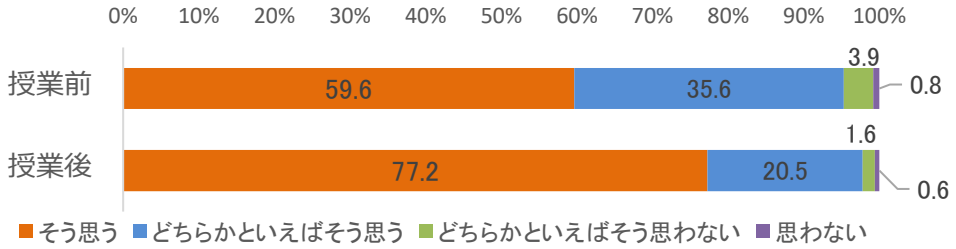
b　がんの学習は、健康な生活を送るために役に立つ



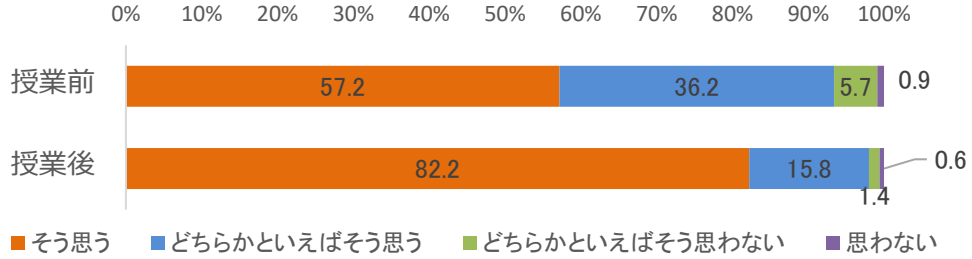
c　自分はがんにならないと思う



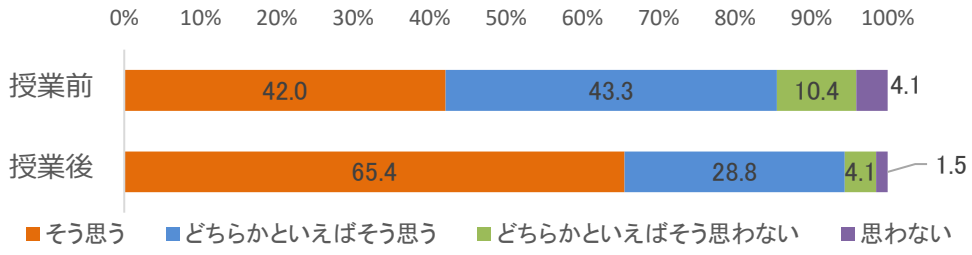
d　日頃から、バランスの良い食事や適度に運動を行うなど健康な体づくりに取り組もうと思う



e　がん検診を受けられる年齢になったら、検診を受けようと思う



f　がんと健康について、まずは身近な家族から語ろうと思う



3．今後の課題及びその取組の方向性（今回の事業により新たに見えた課題など）

（１）がん教育研修会

・教員の働き方改革が求められる中で新たな研修を立ち上げることはなかなか難しい。また、子供を取り巻く健康課題は山積しているため、既存の研修で毎年「がん」を取り上げることは難しい。外部講師派遣事業を活用した地区レベルでの教員研修や、学校保健関係者以外の研修の場等を利用して開催していく必要がある。

・保健体育の教諭が、健康教育の背骨となっている保健体育科の指導の中での「がん」の取り扱いついて学ぶ機会をもち、カリキュラム・マネジメントを意識した学校教育全体でがん教育の推進を図る必要がある。

・県保健医療局より「外部講師リスト」掲載の医療関係者やがん患者団体に研修の周知をしていただいたが、より多くの方に参加していただけるよう周知の方法等改善を図る必要がある。

（２）外部講師派遣事業

・派遣事業のシステムが分かりづらく、外部講師と学校との連絡調整で誤解が生じた件があったため、わかりやすく、活用しやすい派遣事業の方法を検討していきたい。

・新型コロナウイルスの影響により、学校では行事の中止や、外部講師を招聘する教育活動を敬遠する現状があった。外部講師を活用したがん教育の意義やよさ、オンラインを活用した事例等を研修の機会やウェブページに掲載することで、繰り返し発信し、粘り強くこの事業が定着・浸透していくよう取り組んでいきたい。また、学校は、年度途中からの通知では学校行事等に組み入れることが難しいことが多いため、年間行事に組み入れてもらえるように前年度から周知が図れるとよいと考える。

4．モデル校以外での取組について（課題や今後整理すべき事項など）

・すべての学校が学習指導要領に基づいたがん教育を推進できるように、教員研修の機会をもつ必要がある。文部科学省作成の資料や教材についても今一度周知し、活用を図っていきたい。

・「がん教育に取り組む時間の確保」に課題を感じる学校が多いことから、先進校の取組例などを周知し、がん教育を無理なく、どの学校でもあたりまえに行えるよう目指していく必要がある。

・外部講師の育成に関する取組を県教育委員会主体で行うことに困難を感じている。県保健医療局やがん患者団体等との連携をさらに図っていく必要がある。

令和３年度

がん教育総合支援事業　事業成果報告書

地方公共団体名	三重県

１．事業の具体的内容について

（１）自治体における取組

①　協議会について

１．構成員

全員で 12 人

（内訳：学校医代表（小児科）１人、大学病院医師（がん専門医）１人、大学病院臨床心理士１人がん経験者１人、校長１人、教職員１人、市町教育委員会１人、県医療保健部１人、県教育委員会事務局３人）

・他の組織との連携：県医療保健部、三重大学医学部附属病院の専門医及び同医学部教授等、がん患者支援団体

２．開催時期、検討内容

６月　第１回協議会…がん教育の推進に向けた事業の検討

１月　第２回協議会…がん教育に関する事業の検証と学校におけるがん教育の進め方について検討

②　教育委員会としての取組

県教育委員会が作成したがん教育指導教材のポイントや改訂した箇所について、解説を行い、周知が図られた。また、がん罹患者が家族にいる場合の子どもの心理面等に関することや、がんを経験して感じた思いを伝えるなかで、命の大切さや周りにいる人ができること等、教職員や市町教育委員会担当者を対象に講習会を行った。令和３年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、計画では２回実施予定であったが、１回をオンデマンド配信とし、視聴期間を設けて実施した。

③　保健部局や地域の専門機関等との連携

・県医療保健部において、本県のがん診療連携拠点病院である、三重大学医学部附属病院の専門医及び同医学部教授、がん患者支援団体等の関係者と連携を図り、外部講師の派遣、がんに関する教育協議会、がん教育に関する講習会を開催する等、取組をすすめた。

・がん教育外部講師依頼先リストを活用して、外部講師と取り組むがん教育授業を、県内の小・中・高・特別支援学校に募集し、取りまとめを行った。がん教育授業の事前打ち合わせは、申込のあった管轄校の教育委員会、学校とで行い、授業のねらいや配慮すること等を確認した。確認した内容等について、県医療保健部の協力を得ながら、県教育委員会が外部講師との窓口となり、連絡を密にして取り組んだ。

（２）モデル校における取組

市町及び県立高等学校で応募のあった学校において、児童生徒を対象としたがん教育授業を実施した。

・菰野町立朝上小学校・津市立南が丘中学校

・津市立美杉中学校・津市立西郊中学校

・津市立榊原小学校

三重県がん診療連携拠点病院、準拠点病院・地域がん診療連携拠点病院、三重県がん診療連携病院からの専門医及びがん患者支援団体のがん経験者と連携し、指導用教材を活用して、がんに対する正しい知識の習得と理解の深化を図る授業を実施した。

２．事業の達成度について

・がん教育に関する協議会、外部講師を活用した授業前後に児童生徒に「がんの学習アンケート」を行い、集計・グラフ化したもの及び児童生徒の感想を課内資料・協議会資料とし、令和４年度のがん教育の方向性を話し合うことができた。今年度はがん教育講習会が対面式で開催でき、教職員等からの質問に講師が答える等、充実した講習会になった。令和３年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で当初の計画より日程や方法を変更しつつ、がん教育の推進に取り組むことができた。

３．今後の課題及びその取組の方向性（今回の事業により新たに見えた課題など）

1　教職員へのがん教育の必要性の意識啓発

これまで、地域ごとに同内容の研修会（医療従事者・がん経験者による講義）を２回開催していたが、出席人数の実績やコロナ禍の状況をふまえ、１回の対面式講習会と web での開催の両軸にて、実施することを考えている。

2　本人を含め、身近にがん患者がいる、またはがん等で亡くなった家族等がいる児童生徒への配慮の在り方と具体的な手だて等を研究する。

3　県教育委員会ホームページに掲載している指導用教材や手引きの改訂と更新

４．モデル校以外での取組について（課題や今後整理すべき事項など）

・「がん教育」学校用教材の周知や普及に向けた取組
・高等学校における取組の拡大
・各市町によるがん教育の取組の拡大

令和３年度

がん教育総合支援事業　事業成果報告書

地方公共団体名	兵庫県

１．事業の具体的内容について

（１）自治体における取組

①　協議会について

１．構成員（15 名：医師１名、大学教授１名、県健康福祉部１名、県教委３名、校長４名、養護教諭３名、教職員２名）

構成員氏名	所属及び役職
橋本　彰則	県医師会　常任理事
中村　晴信	神戸大学大学院　教授
吉野　浩司	県立北摂三田高等学校　（モデル校）　校長
山根　　尚	県立長田高等学校　（モデル校）　校長
中條　浩樹	姫路市立朝日中学校　（モデル校）　校長
立田　仁美	洲本市立加茂小学校　（モデル校）　校長
中島　理恵	県養護教諭研究会連盟　会長
安齋　律子	県立北摂三田高等学校　（モデル校）　授業担当教員
小寺　麻子	県立長田高等学校　（モデル校）　授業担当教員
藤本　朋子	姫路市立朝日中学校　（モデル校）　授業担当教員
奥井　美穂	洲本市立加茂小学校　（モデル校）　授業担当教員
田所　昌也	県健康福祉部感染症等対策室疾病対策課長
北中　睦雄	県教育委員会事務局体育保健課長
森鼻　崇文	県教育委員会事務局体育保健課主任指導主事兼主幹
西本　高丈	県教育委員会事務局体育保健課指導主事

２．開催時期、検討内容

○第１回協議会（令和３年８月 31 日　兵庫県民会館）

議事

（１）がん教育に関する計画（案）について

（２）がんに関する事業内容について

ア　がん教育に関する授業の実施について

イ　講演会について

ウ　研修会について

エ　アンケートについて

オ　今後の取り組みについて

○第２回協議会（令和４年１月 31 日　ひょうご女性交流会館）

議事

（１）令和３年度成果と課題について

（２）外部講師窓口リスト時点修正について

（３）令和４年度がん教育総合支援事業について

② 教育委員会としての取組

○モデル校４校（高等学校２、中学校１、小学校１）に講師を派遣し、講演会を開催した。

※詳細は、（２）モデル校における取組に記載のため省略

○がん教育に関する教職員及び外部講師対象の研修会の開催（令和３年 12 月７日（火））

学校におけるがん教育において、外部講師の関わり方を充実させることにより、より効果的ながん教育の実施を図ることができるように、外部講師及び教職員、市町組合教育委員会担当者等対象に開催した。

本研修会では、がん患者グループゆずりは代表の宮本直治氏より、「「今、ここにある　いのち」～体験から見えてきたもの～」というテーマで、新潟医療福祉大学健康スポーツ学科教授の杉崎弘周氏より「学校におけるがん教育の考え方・進め方」というテーマで講演頂いた。

また、モデル校担当者等で「がん教育に関する実施上の課題解決について」というテーマで、パネルディスカッションを実施した。

【参加人数：外部講師 11 名、教育事務所３名、教育委員会 12 名、教職員 88 名、計 114 名】

○がん教育に関するモデル校実践研究発表会の開催（令和３年 12 月 21 日（火））

本発表会では、昨年度のモデル校担当者を中心に、各校の取組を発表頂いた。その後、参加者を４人１グループに分けて、グループ協議を実施した。

【参加人数：外部講師２名、教育事務所３名、教育委員会 17 名、教職員 59 名、計 81 名】

③ 保健部局や地域の専門機関等との連携

○県健康福祉部と連携し、がん診療連携拠点病院や県医師会の協力を得て、外部講師となりえる医療関係者等に対して、研修会を実施した。内容としては、新潟医療福祉大学健康スポーツ学科教授の杉崎弘周氏より新学習指導要領を踏まえたがん教育の考え方と進め方についてご講義いただいた。

また、パネルディスカッションにおいても、杉崎教授にコーディネーターをして頂き、モデル校において、外部講師を活用する際に必要な情報や、児童生徒の現状を外部講師に必ず伝えるなど、外部講師と教職員双方に対して、講演会等の際に役立つスキルをご教示頂いた。

○外部講師の連絡体制が取りやすくなるよう、県健康福祉部と連携し、がん診療連携拠点病院における外部講師の窓口担当者リストを時点修正行い、昨年度の 44 名から 57 名に増加することができた。

（２）モデル校における取組

○令和３年 10 月 22 日　姫路市立朝日中学校

講演予定であった、鄭信義氏が、当日朝に緊急入院されることになり、急遽、藤本養護教諭が対応。「「いのちの輝かせ方」鄭信義さんのお話から」と題して、鄭さんがお話される予定であった内容と、「がん患者として残された命をどのように生きていくのか」といった、鄭さんの生活の様子などを含めた内容であった。

【講師】姫路市立朝日中学校　養護教諭　藤本朋子　氏

「「いのちの輝かせ方」鄭信義さんのお話から」

【参加人数】３年生及び教職員、保護者等　275 名

【実施科目・授業時数】総合的な学習の時間１時間

○令和３年 11 月 19 日　洲本市立加茂小学校（１回目）

講演内容は、「癌」という漢字の由来にはじまり、がんとはどういう病気なのか、淡路島でのがん患者は、どのぐらいいるのかなどを、わかりやすく説明頂いた。

【講師】洲本伊月病院　副院長　藤本　芳正　氏

「がんを知ろう」

【参加人数】６年生及び教職員　42 名

【実施科目・授業時数】総合的な学習の時間１時間

○令和３年 11 月 29 日　洲本市立加茂小学校（２回目）

講演内容は、第１回目の流れを汲んでおり、がんを知り、命の大切さを知るという内容であった。特にがん患者は、どのような生活をしているのかを具体的に紹介頂いた。

【講師】NPO 法人ホームホスピス淡路島

理事長　山本　美奈子　氏

「がんのことを知って命を大切に」

【参加人数】６年生及び教職員　42 名

【実施科目・授業時数】総合的な学習の時間１時間

○令和３年 11 月 29 日　県立北摂三田高等学校

講演内容は、元来医師として活動する中で、がん患者と向き合いながら、余命宣告を受けた人々の生活を支えるホームケアクリニックの活動を紹介された。特にご自身の祖母を介護した実体験を中心にお話頂いた。

【講師】たなかホームケアクリニック

院長　田中　章太郎　氏

「がん診断後の暮らしについて」

【参加人数】１年生及び教職員、保護者等　190 名

【実施科目・授業時数】総合的な学習の時間１時間

○令和３年 12 月 20 日　県立長田高等学校

講演内容は、本協議会で作成した高校生用の PPT をバージョンアップさせて、がんの基礎知識や、日本のがん患者数の推移とその背景などをご教示頂いた。

また、情報リテラシーや健康リテラシーについてもお話頂き、健康の保持増進には、行動変容が重要であることを説明いただいた。生徒からは、講演内容に対して、意識の高い質問が多く寄せられた。

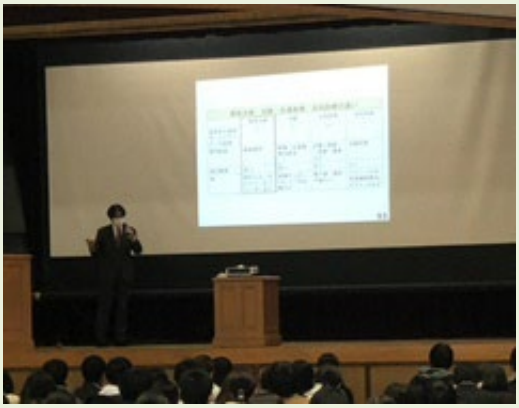
【講師】神戸大学大学院人間発達環境学研究科

教授　中村　晴信　氏

「がんについて　～情報の理解と活用～　」

【参加人数】１年生及び教職員等　320 名

【実施科目・授業時数】総合的な学習の時間１時間



２．事業の達成度について

○アンケート結果より、上記１３項目中１２項目が実施後、増加した。

○「がんの治療方法はいくつかあるが、医師が決めるものである。」「がんになっても生活の質を高めることができる。」項目について、昨年度より増加しており、がんをより身近なものとして捉え、全体的に正しい知識が得られた。

○外部講師を活用した講演会を実施したモデル校では、上記 11 項目中、８項目において増加率が大きく、改めて外部講師の活用が重要であると認識できた。

○「がんになっても生活の質を高めることができる。」項目については、外部講師を活用できなかったモデル校でも実施後、増加したため、講演の内容を児童生徒の実情に合わせて精査することで、より効果的になると認識できた。

○教職員・外部講師を対象としたアンケート結果より、概ね良かったという意見が多かった。

○実践発表やパネルディスカッションにより、イメージが持ちやすく参考になったという意見が多かった。

○モデル校同士のパネルディスカッションでは、がん教育の実情を参加者に情報提供することができた。

○モデル校において、どの学校においても継続的に実施可能な取組を実施・検討できた。

	がんの学習について	実施前	実施後	増減
(1)	１）a がんの学習は、健康な生活を送るために重要だ。 「そう思う」と答えた児童生徒の割合	82.0% (73.7)	89.9% (90.0)	＋7.9 (＋16.3)
	１）b がんの学習は、健康な生活を送るために役立つ。 「そう思う」と答えた児童生徒の割合	82.2% (72.1)	88.8% (88.6)	＋6.6 (＋16.5)
(2)	がんやがん患者に対する正しい理解と認識を学ぶことができた。	実施前	実施後	増減
	２）c がんは日本人の死因の第２位である。 「誤り」と答えた児童生徒の割合	61.5% (58.3)	74.9% (74.3)	＋13.4 (＋16.0)
	２）e 早期発見すれば、がんは治りやすい。 「正しい」と答えた児童生徒の割合	95.7% (91.5)	97.1% (90.7)	+1.4 (-0.8)
	３）e がんの治療方法はいくつかあるが、医師が決めるものである。 「そう思わない」と答えた児童生徒の割合	39.2% (19.4)	56.9% (30.4)	＋17.7 (＋11.0)
	３）f がんになっても生活の質を高めることができる。 「そう思う」と答えた児童生徒の割合	32.0% (18.6)	62.1% (33.9)	＋30.1 (＋15.3)
	３）g がんになっている人も過ごしやすい世の中にしたい。 「そう思う」と答えた児童生徒の割合	80.5% (54.9)	85.1% (64.8)	＋4.6 (＋9.9)
(3)	健康の大切さについて主体的に考えるようになった。	実施前	実施後	増減
	３）a 自分はがんにならないと思う。 「そう思わない」と答えた児童生徒の割合	46.7% (37.9)	55.7% (49.0)	＋9.0 (＋11.1)
	３）c 日頃から、バランスの良い食事や適度に運動を行うなど健康な体づくりに取り組もうと思う。 「そう思う」と答えた児童生徒の割合	62.0% (60.3)	74.2% (74.2)	＋12.2 (＋13.9)
	３）d がん検診を受けられる年齢になったら、検診を受けようと思う。 「そう思う」と答えた児童生徒の割合	62.5% (51.3)	78.3% (70.1)	＋15.8 (＋18.8)
	３）h がんと健康について、まずは身近な家族から語ろうと思う。 「そう思う」と答えた児童生徒の割合	47.4% (43.2)	60.8% (56.7)	＋13.4 (＋13.5)
	３）i 家族や身近な人が健康であってほしいと思う。 「そう思う」と答えた児童生徒の割合	95.7% (92.7)	95.2% (94.1)	-0.5 (＋1.4)
	３）j 長生きをするために、健康な体づくりに取り組もうと思う。 「そう思う」と答えた児童生徒の割合	80.4% (78.6)	82.4% (83.6)	＋2.0 (＋5.0)

３．今後の課題及びその取組の方向性（今回の事業により新たに見えた課題など）

○アンケート結果や協議会での意見を踏まえて、以下の課題に取り組んでいく。

(1)「がんになっている人も過ごしやすい世の中にしたい。」「家族や身近な人が健康であってほしいと思う。」「長生きをするために、健康な体づくりに取り組もうと思う。」の３項目については、減少あるいは微増となったので、がんと共に生きる社会づくりに寄与する資質や能力の育成についてモデル校単位で検討し、効果的な外部講師の活用や、講演内容の精選を行う。

(2)外部講師の窓口リストの周知拡大

(3)がん教育の県内への普及・啓発

(4)講師謝金等の経費の確保とその方法

(5)教育課程や年間計画に位置付けた実践例の周知

(6)配慮すべき児童生徒がいる場合の具体的な対応の仕方（事前・事後にどのように配慮したか。具体的にどのような配慮をしたか。児童生徒への配慮が“授業を受けなくても良い”だけになっていないか。）

○モデル校それぞれでは、がん教育の推進が図られており、充実した内容になっている。今後は、モデル校ではなくなった学校が、がん教育の実施に関して、どのように継続的に取り組むことができるのかが課題と考えている。今年度のモデル校実践研究発表会では、昨年度までモデル校であった学校より報告があり、モデル校になったことをきっかけに、当たり前の様にがん教育が実践できているとの報告を受けた。このことから、モデル校ではなくなった学校や、モデル校以外の学校が取り組むことができるきっかけ・方法論などを提示していくことに取り組む必要がある。

４．モデル校以外での取組について（課題や今後整理すべき事項など）

○現在、文科省より依頼されている、「がん教育実施状況調査」より、外部講師を活用してがん教育を実施したモデル校以外の校数や、実施率などをまとめた上で、県下各校に集計結果報告をするとともに、この度時点更新された外部講師窓口リストを添付して発送する予定。

○特に、モデル校以外の学校が、がん教育を実施する上で苦慮する点は、上記にあるアンケート結果から把握できている。来年度のモデル校から、特に下記についての方法論などを中心に、研修会において報告して頂く。

・配慮を要する児童生徒への具体的な対応内容

・年間計画や教育課程上における位置づけ、及びがん教育実施時間の確保

・外部講師の選定と謝金等の経費確保

令和３年度

がん教育総合支援事業　事業成果報告書

地方公共団体名	奈良県

１．事業の具体的内容について

（１）自治体における取組

①　協議会について

１．構成員

全員で１１人

（内訳：学校保健技師・大学教授（放射線腫瘍医学）・県医師会理事・小中高校長５名・県福祉医療政策部疾病対策課長・県教育委員会事務局学校教育課長・県教育委員会事務局保健体育課長）

２．開催時期、検討内容

・第１回推進会議（7 月）：事業の推進に向けた計画の検討

・第２回推進会議（11 月）：事業の中間報告と計画の確認

・第３回推進会議（2 月）：事業成果の報告と検証・課題の検討

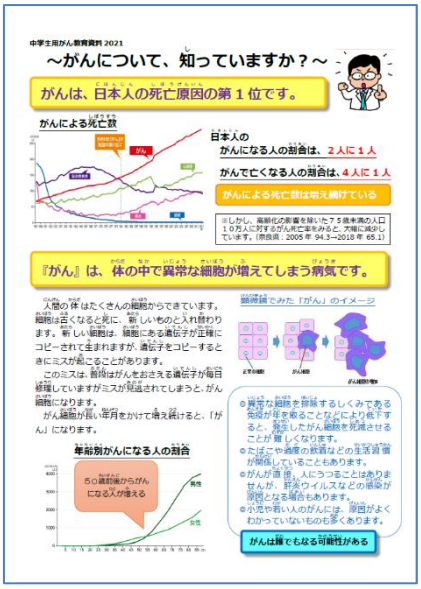
②　教育委員会としての取組

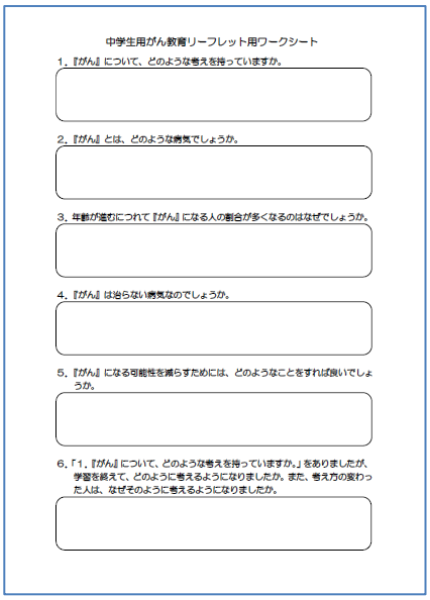
●高等学校における「外部講師を活用したがん教育」

奈良県がん診療連携拠点病院や奈良県医師会と連携し、がん専門医による外部講師リストを作成したうえで、学校と外部講師を繋ぐためのシステム構築を目指した。令和３年度～５年度の間に全県立高等学校でがん教育の実施を目指し、令和３年度は、公立高等学校１２校で「外部講師を活用したがん教育講演会」を実施した。

●中学校におけるがん教育

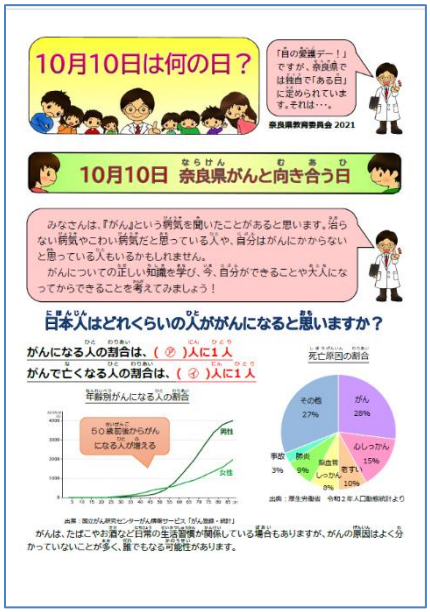
中学生向けのがん教育リーフレットや補助教材（ワークシート）を作成し、教職員向けがん教育研修会において、その活用方法等について周知した。

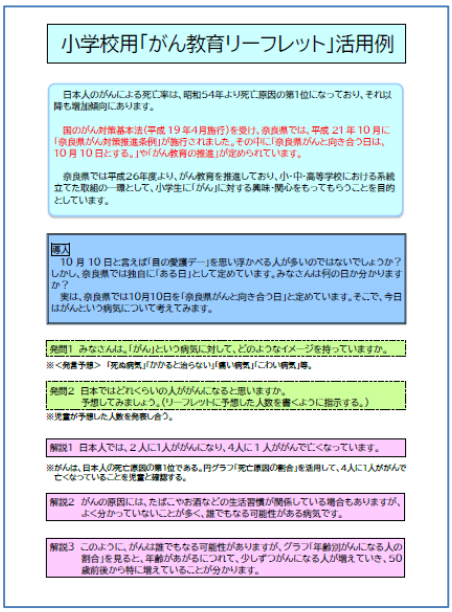


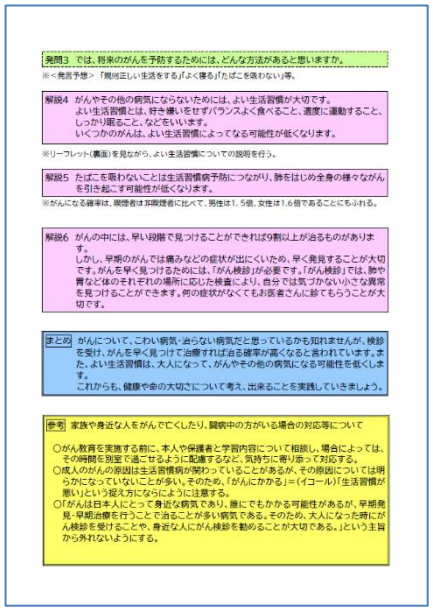


●小学校におけるがん教育

小学生用リーフレットを見直し、短時間で展開できる活用例と共に「１０月１０日奈良県がんと向き合う日」に合わせて配布した。活用例の中では、指導者の不安を解消できるよう、学校で配慮すべき事項等を加え、リーフレットの配布前に実施した教職員向けがん教育研修会において、リーフレットを活用したがん教育の実践発表を行うなど、具体的な取組方法を周知した。







●がん教育研修会

第１回がん教育研修会では、がんに関する基礎知識を外部講師により講演していただき、小・中・高各校種におけるがん教育の実践発表を行った。

第２回がん教育研修会については、文部科学省が主催する「令和３年度がん教育研修会・シンポジウム」にリモート参加する形に置き換えた。直接、調査官の講義や各校種でのがん教育の実践の取組について視聴することができる貴重な機会となった。

③　保健部局や地域の専門機関等との連携

「外部講師リスト」を作成するにあたり、県福祉医療政策部疾病対策課の勧めにより、奈良県がん対策推進会議の座長であり本事業の協議会の委員でもある県立医科大学長谷川教授から、がん診療拠点病院の医師に外部講師への参加を募っていただくことで、外部講師の確保を円滑に行うことが出来た。

２．事業の達成度について

当初、計画していた事業目標に対して、新型コロナウイルス感染症の影響により県立高等学校１校でのがん教育講演会が中止となったものの、その他の事業については概ね計画通りに実施することができた。

令和３年度がん教育の取組状況調査（県独自調査、令和３年１１月実施）において、高等学校では６８．３%から７４．５%へ増加、中学校では８５．３%から８１．２%へ減少、小学校では、７２．５%から７１．９%とほとんど変化は無かった。いずれの校種においても、新型コロナウイルス感染症の影響により学習時間の確保が困難になり、がん教育の実施が難しい状況であった。

また、学習指導要領の改訂を受け、令和４年度からがん教育についても全ての高等学校で実施することが必須となるため、令和３年度からは外部講師派遣をモデル校としての取組ではなく、各学校からの依頼を受け外部講師を派遣する形としたが、円滑な実施のために外部講師リストの確保や派遣システムの構築を目指し、外部講師リスト及び外部講師派遣様式の作成を行った。

３．今後の課題及びその取組の方向性（今回の事業により新たに見えた課題など）

現在は、国費により外部講師派遣にかかる謝金等に十分な予算が得られているが、今後、国の支援が受けられなくなった場合でも外部講師派遣を継続可能なものとするため、がん療養拠点病院等との連携を図っていく必要がある。

また、まだまだがん教育の実施率が十分とは言えないため、各校でのがん教育について、指導にあたる教員の知識不足やがん教育の必要性について理解を得られるよう研修会の充実や周知の方法を効果的にするなど工夫し、がん教育の実施率が向上するように努める。

４．モデル校以外での取組について（課題や今後整理すべき事項など）

今後、がん教育に特化した授業時間の確保が益々困難になることが予想されるため、授業の中で活用できる形でのがん教育教材の作成や、外部講師の専門性を活かしたがん教育の展開について検討していく必要がある。

令和３年度

がん教育総合支援事業　事業成果報告書

地方公共団体名	和歌山県

１．事業の具体的内容について

（１）自治体における取組

①　協議会について

１．構成員

全員で１２人

内訳：がん専門医（腫瘍内科）１人、県学校医会（小児科）１人、県がん患者連絡協議会１人、
県学校保健主事研究会１人、県養護教諭研究会１人、モデル校担当地域指導主事１人、
モデル校担当教員２人、健康局健康推進課１人、学校教育局教育支援課１人、事務局２人

２．開催時期、検討内容

【第１回協議会】

・日　　程：令和３年１１月２４日（Ｗｅｂ会議）

・協議内容：がん専門医、学校医、がん経験者、県福祉保健部健康推進課、学校関係者等でがん教育推進のための事業計画について確認するとともに、令和２年度までの事業内容を踏まえ、児童生徒の理解を促すための効果的な指導方法について協議を行った。

【第２回協議会】

・日　　程：令和４年１月２７日（新型コロナウイルス感染症の影響により中止）

②　教育委員会としての取組

○普及・啓発

教職員及び外部講師を対象に、本県におけるがんの状況及びがん教育の実施状況、がん教育推進に係る法的根拠、外部講師依頼時の要点、各発達の段階における取扱い等について説明を行うとともに、がん専門医による講演で文部科学省の教材を活用した外部講師によるがん教育の推進について働きかけるため、研修会を計画していた。また、学校医等が外部講師として積極的に参画できるよう、学校医研修会において、がん教育に関する説明及びがん専門医によるがん教育の実践事例を踏まえた講演を計画していたが、いずれも新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から実施を見合わせた。

③　保健部局や地域の専門機関等との連携

・本県のがんに関する現状等について教材を作成するための検討

・外部講師を確保するため、がん診療拠点病院及びがん患者連絡協議会との連携

・和歌山県医師会や病院協会等と連携を図り、外部講師リストの作成

（２）モデル校における取組

○有田市立箕島中学校

テーマ：「がんの予防と早期発見についての知識を身に付けよう」

日　程：令和４年２月４日

講　師：和歌山県立医科大学附属病院　病院教授　上田　弘樹　氏

対　象：２年生９３名

内　容：生徒の理解を促すため、文部科学省作成の教材を活用したがん専門医による講義（１時間）とワークショップ（１時間）を取り入れて実施を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から実施を見合わせた。

○海南市立巽中学校

テーマ：　「がんについて生活習慣から見直そう」

日　程：　令和４年２月９日

講　師：　和歌山県立医科大学附属病院　病院教授　上田　弘樹　氏

対　象：　２年生４９名

内　容：　生徒の理解を促すため、文部科学省作成の教材を活用したがん専門医による講義とワークショップを取り入れて実施を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から実施を見合わせた。

〇外部講師の活用に当たって工夫している点

外部講師を活用したがん教育モデル授業については２校を予定していたが、いずれも事前打合せを行った後に新型コロナウイルス感染症の影響により実施を見合わせた。外部講師を活用したがん教育の実施に係る事前打合せにおいては、場所や時間等機会の設定が困難であった。そのため、短時間であっても効率的に打合せを行うことができるよう、学校においては、「がん教育事前打合せシート」に基づき授業を計画し、打合せ時に講師と協議すべきことを明確にできるようにした。また、外部講師との打合せにおいては、医療機関を訪問し、対面で実施することが困難であったため、Ｗｅｂ会議システム等を積極的に活用するよう促した。

２．事業の達成度について

令和３年度のがん教育総合支援事業においては、外部講師を活用したがん教育を推進するため、外部講師リストの作成や研修会の充実、モデル校における実践等様々な事業計画を立案していたが、新型コロナウイルス感染症の影響等により、多くの事業について実施を見合わせることとなった。

○**協議会の果たす役割についての評価**

協議会については、Ｗｅｂ会議システムを活用して開催することができた。令和元年度及び令和２年度の事業内容から、児童生徒の理解を促すための効果的な指導方法として、発達の段階を踏まえる必要があること、県内のがんの状況等を指導内容とすることなどの意見が得られた。また、がん教育の内容は多岐にわたることから、ねらいを明確にした上で、指導内容や指導方法を検討することで、より効果的な指導を行うことができるとの意見があげられた。さらに、がん教育実施後には、各家庭においてがんに関する話題が出されたことにより、がん検診に対する保護者の意識に変容が見られたとの成果も得られたが、協議した内容等を踏まえた事業展開を行うことができなかった。

○**がん教育研修会についての評価**

令和元年度の研修会については、開催要項を関係機関にも周知したことで、学校関係者だけではなく、市町村の保健師や医療機関の看護師、がん診療拠点病院の職員等職種に拡がりが見られた。しかし、令和２年度以降は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、研修会の開催を見送ったことにより、学校関係者や外部講師等に対してがん教育について啓発する機会を持つことができなかった。また、令和３年度は、特に学校医等が外部講師として積極的に参画できるよう、学校医研修会において、がん教育に関する説明及びがん専門医によるがん教育の実践事例を踏まえた講演を行うよう計画していたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から実施を見合わせた。

研修会の開催方法を検討し、がん教育を実施するに当たっては、がん専門医や学校医、がん経験者等外部講師を活用することが効果的であることについて啓発する必要があると考える。

○**外部講師リストに関する評価**

外部講師リストの作成を行うため、県福祉保健部と連携を図るとともに、県医師会にも協力を要請し、８８名の開業医が外部講師として登録された。また、がん教育を通して「命の大切さ」を学習するために

は、がん経験者等の参画も必須であるため、県がん患者連絡協議会の代表者に協議会の委員を依頼し、外部講師として協力していただくよう要請した。引き続き、関係機関等と連携を図り、外部講師リストの充実及び派遣のための窓口を設定する。また、外部講師リストの効果的な運用方法及び外部講師リストに記載された外部講師に対する研修の在り方等については検討する必要がある。

○**モデル校における評価**

がん専門医を活用したがん教育モデル授業については２校を予定していたが、いずれも事前打合せを行った後に新型コロナウイルス感染症の影響により実施を見合わせた。外部講師を活用したがん教育の実施に係る事前打合せにおいては、学校が計画した「がん教育事前打合せシート」及びＷｅｂ会議システム等を活用し、効率的に打合せを行うことができた。「がん教育事前打合せシート」を活用することにより、学校が計画すべき事項を協議した上で、打合せを行うことができるため、学校主導の指導計画を立案することができた。今後は、Ｗｅｂ会議システム等を活用した効果的ながん教育の在り方を検討していく必要がある。

３．今後の課題及びその取組の方向性（今回の事業により新たに見えた課題など）

- 新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、令和３年度も多くの事業について実施を見合わせることとなった。令和元年度までの取組により、関係機関等と連携を図りながら、本県における外部講師を活用したがん教育も少しずつ軌道にのり始めていたことから、令和４年度については、新型コロナウイルス感染症の影響も考慮した上で事業計画を行い、継続して事業を推進していきたいと考える。
- 研修会については、外部講師及び教職員を区分して実施し、特に外部講師リストへの登録者に学校医が多いことから、学校医研修会等において研修を行う必要がある。また、県内全域でがん教育を推進するに当たっては、研修会の開催地方を検討するとともに、養護教諭のみならず、保健体育科教諭や管理職、市町村教育委員会の担当者の出席を促す必要がある。
- モデル校について、選定した２校において、計画及び事前打合せは行ったが実施に至らなかったことから、令和４年度に改めて実施する予定である。今後も、校種や外部講師の種類、取扱う時間等により様々なモデルケースを蓄積し、がん教育の在り方や協力体制の整備について検討するとともに、モデル校での実践を先進的な事例として、啓発していく方法についても検討する必要があると考える。
- 文部科学省が作成した教材だけではなく、児童生徒がより身近なこととして捉えることができるよう、和歌山県のがんに関するデータを授業で活用できるような資料にしていきたい。
- 外部講師リストについて、県医師会の会員のみならず、がん診療連携拠点病院等の医療関係者やがん経験者等にも登録していただけるよう働きかける必要がある。また、作成した外部講師リストの運用方法を整備していく必要があると考える。

４．モデル校以外での取組について（課題や今後整理すべき事項など）

- 外部講師の活用により指導効果の高まりが見られることから、外部講師を活用したがん教育の実施率や課題等を踏まえ、外部講師の活用の在り方について提示する必要がある。
- 関係機関等と連携を図りながら外部講師リストを充実させるとともに、研修会等外部講師活用のためのガイドラインの内容について具体例を示しながら研修会等で周知する必要がある。
- がん教育の実施について、市町村教育委員会及び県立学校に対し、さらに周知を徹底していくとともに、外部講師を活用したがん教育の実践を行い、内容の充実を図っていく。
- 事業全体を通して、関係機関等と連携を図りながら、本県における外部講師を活用したがん教育も少しずつ軌道にのり始めていることから、今後も継続して事業を推進していきたいと考える。

令和３年度

がん教育総合支援事業　事業成果報告書

地方公共団体名	鳥取県

１．事業の具体的内容について

（１）自治体における取組

①　協議会について

１．構成員

全員で１９人
大学教授１人、医師（内科医）１人、薬剤師１人、がん患者団体１人、PTA（中、高等学校）代表２人
校長（小、中、高等学校、特別支援学校）４人、保健体育主事部会代表１人、養護教諭部会代表１人、
県福祉保健部健康政策課１人、教育委員会事務局６人

２．開催時期、検討内容

〇第１回がん教育推進協議会（オンライン）　令和３年１０月２１日（木）
【報告】・令和２年度がん教育推進事業　　・令和２年度出張がん予防教室
【説明】・令和３年度がん教育推進事業の計画　　・令和３年度出張がん予防教室の計画
【協議】・学校におけるがん教育推進について

〇第２回がん教育推進協議会（オンライン）　令和４年１月２８日（金）
【報告】・令和３年度がん教育推進事業　　・令和３年度出張がん予防教室
【説明】・令和４年度がん教育推進事業の計画　　・令和４年度出張がん予防教室の計画
【協議】・がん教育推進における課題について

②　教育委員会としての取組

〇がん教育啓発研修会の開催
学校においてより効果的ながん教育が実施されるよう、指導内容の充実と教職員等の正しい理解を図ることを目的に、県外から講師を招き、研修会を開催した。（オンライン開催）
（１）説　明　「学校におけるがん教育の推進に向けて」
鳥取県教育委員会事務局体育保健課
（２）講　演　「学校における保健教育とがん教育」
新潟医療福祉大学健康スポーツ学科　　教授　杉崎　弘周　氏
（３）講　義　「子どもたちの気持ちに寄り添うこと」
国立がん研究センター中央病院緩和医療科　ホスピタルプレイスタッフ　小嶋　リベカ　氏

○がん教育公開授業及び講演会の開催
県内で２校（中学校１校、高等学校１校）を推進校とし、外部講師を活用した授業公開及び講演会を開催し、がん教育実践を県内に発信した。

③　保健部局や地域の専門機関等との連携

○県福祉保健部との連携
・県福祉保健部が主催する「出張がん予防教室」を各学校へ周知した。
・県福祉保健部 Web ページ掲載の「出張がん予防教室」資料を啓発研修会で紹介した。
・学校での取組み等を情報共有し、がん教育推進について協議した。

○県医師会との連携
・県医師会からがん教育推進協議会の委員を選出してもらい、がんについての専門的知識や医療現場の実態等を踏まえたがん教育の進め方について助言をいただいた。

（２）モデル校における取組

〇三朝町立三朝中学校

公開授業

保健体育「健康的な生活と疾病の予防　生活習慣病などの予防　がんの予防」

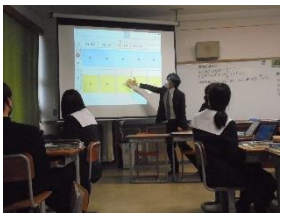
記念講演会

講演「人生を豊かに育むための教育～がん・性・こころ・からだの教育～」

東京医療保健大学医療保健学部看護学科　教授　渡會　睦子　氏

保健体育の授業では、町の保健師が、がんに関しての専門的な知識に加え、三朝町のがん検診受診率などの現状を説明した。町の現状と授業内で学んだことを踏まえ、「自分たちにできること」、「町のためにできること」などを考える発展的な内容に取り組んだ。

講演会では、生徒が授業内で考えた取組を講演会講師が意味づけし、一連の流れの中で生徒ががんに対して様々な方向から考え、学べるよう構成されていた。



〇県立鳥取湖陵高等学校

公開授業

保健体育「がんの理解と共に生きるとは　～寄り添うって何だろう？～」

講演会

講演「健康と命の大切さ　～がんと共に生きる私から～」

医療法人養和会　　看護師　松本　みゆき　氏

講演会講師は事前に学校を訪問し、学校や生徒の雰囲気を観察したり、授業内容や講演内容を担当教諭と打合せを行ったりするなど、事前の準備をしっかり行い、当日に臨んだ。

また、自身が、がんサバイバーということを講演の冒頭で生徒に伝え、がんの専門的な知識に加え、がん患者や家族の気持ち、生活の変化や願いなどが講演の内容に盛り込まれた。

２．事業の達成度について

（１） がん教育推進協議会の実施

協議会でがん教育の重要性やがん教育推進（普及）にあたっての課題を共有できた。

＜委員からの主な意見＞

・正しい知識が正しい治療につながる。がん予防、早期発見のためにはがん教育は必要不可欠である。

・「がん」を取り扱うことは、心身ともにデリケートで難しさがある。状況や気持ちの持ち方が一人ひとり違うので、常にその時々に合わせて考える必要があり、よい実践を発信していくことが必要。

・授業時間が限られる中でがん教育以外にも重要なトピックスも多くあり、時間が取れない現状があるが、よい教材や効果的な内容を考えていく必要がある。

（２） がん教育啓発研修会の開催

参加者アンケートの結果（本研修満足度：４段階評価）

満足した　４４％　概ね満足した５６％　となっており、全参加者が肯定的な回答であった。

＜参加者の感想＞一部抜粋

・私は高等学校教諭であるが、保健の授業では中学校の教科書の内容も確認しながら行っているため、小学校からの流れがわかりたいへん参考になった。

・がん教育について、教科書をもとに子どもたちに無意識のうちに「がん＝喫煙・飲酒。だから、お酒とたばこはだめ。」というイメージをつけてしまっているなと反省したとともに、自分自身もそういう風にインプットしてしまっていることに気付いた。今日の話を聞いて、がんの原因が生活習慣やたばこであるということに重きをおくのではなく、現在の日本のがんの現状をきちんと伝えること、がんによる患者さんの心の動きや、支える家族の生活や気持ちのゆらぎ等、複雑であるということを子どもたちに伝え、そういったことに少しでも配慮できるような力をつけることが大切な学びになると感じた。

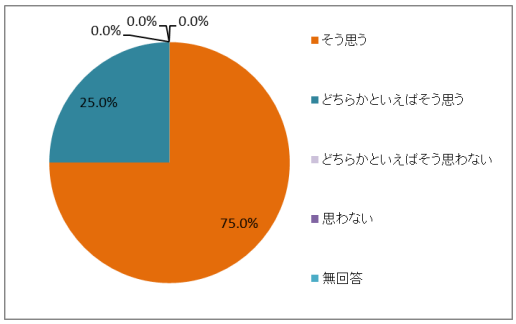
・保護者ががん患者、がん経験者である児童はこれから増えていく中で、どのように配慮していくべきか悩んでいた。保護者の考えや児童のがんに対する意識を知ることができ、とてもよい研修になった。

（３） がん教育公開授業及び講演会の開催

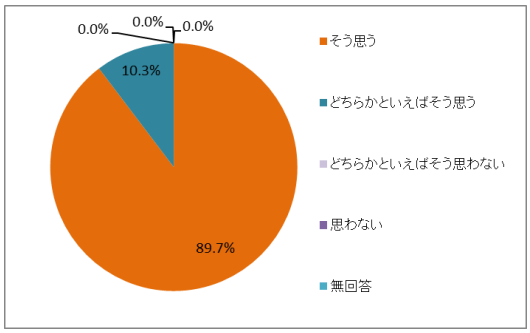
がん教育公開授業及び講演会実施前と実施後のアンケート結果（一部抜粋）を比較すると、以下の結果となり、がん教育の重要性や将来のがん検診への前向きな参加など、意識の高まりが見られた。

〇がんの学習は、健康な生活を送るために重要だ。

＜実施前＞

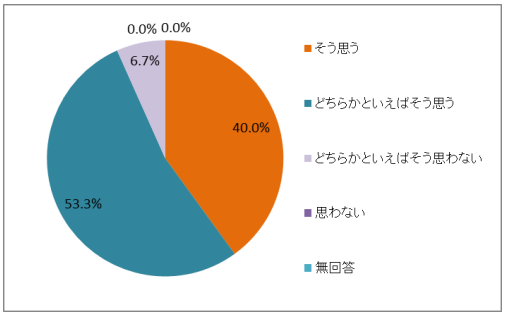


＜実施後＞

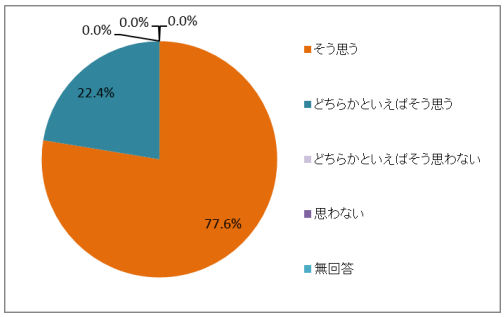


〇がんの検診を受けられる年齢になったら、検診を受けようと思う。

＜実施前＞



＜実施後＞



３．今後の課題及びその取組の方向性（今回の事業により新たに見えた課題など）

○学校において、がん教育を体育・保健体育科の教員や養護教諭に任せているという実態もあった。教職員全員が、がん教育は体育・保健体育の授業内で完結するものではなく、学校の教育活動全体を通じて行うという意識を持って取り組めるように、引き続き研修会や公開授業等を開催し、普及啓発を図っていく。

○昨年度（令和２年度）県内で公募した外部講師がうまく活用できなかったため、周知や活用の方法を検討していく必要がある。

○外部講師を活用する際に、外部講師との事前打ち合わせが不十分だった学校も見られた。事前打ち合わせを確実に行い、学校のニーズやねらいに応じた取組ができるように、外部講師を活用したがん教育ガイドライン（文部科学省）の紹介や外部講師活用の実践記録等を周知していく。

○県内において、地域や校種に偏りなく実践を普及できるようにモデル校選定の際には、地域や校種を考慮し、今後の見通しを持って選定する。

４．モデル校以外での取組について（課題や今後整理すべき事項など）

○研修会等での学校や教職員への周知
- がん教育は学校の教育活動全体を通じて行う。
- 小学校、中学校、高等学校の系統性を踏まえた指導計画の作成と指導の充実を図る。
- がん教育の目標が達成できるよう、進め方や教え方、教材、外部講師の活用等を考える。
- 体育・保健体育で取り扱う場合、学習指導要領（解説）を確認し、必ず理解させる内容なのか、内容に触れる（理解させるではなく、発展的に取り扱う）のかを明確にする。

○がん教育啓発研修会への参加は、これまで養護教諭の参加が多く、それ以外の参加者は少数であった。様々な立場の教職員が参加してがんについての正しい知識や効果的な学習方法を学んでもらい、モデル校以外でも取組が進むよう、様々な機会をとらえ、参加を呼び掛けたい。